分に就て不生と云ふたは、重罪と知りて懺悔せしめんが爲めであるから抑止である、喩へば一子ありて惡を造る、父母造惡の當分に就て大呵放逐す、意ろ捨惡遷善せしむるにありて攝取の爲めの抑止である、今亦爾りで造惡當分に就て放逐して不生と云ふは廻心攝取の爲めの故に、尙これ攝取の爲めの抑止である、觀經の顯文已上所辯の如くなるも、更に九品一品一品諸機を攝する邊より尅實すれば下々品にも亦說機を攝して、則四句分別を成して、單謗無逆、單逆無謗、亦逆亦謗の機あるならんも下々品は極惡まで說下すの說相であるから、不逆不謗の句は造らぬ方可であらふ、已上三學說の一長一短は論場の研究に讓らふ、次に散善義の逆謗除取の釋義を一言せむに、文に云「仰就抑止門中解、(中略)、此義就抑止門解竟」と、抑止とは暫除の義で永除ではない、初めに抑止門と標し、終りに就抑止門解竟と結してあるから、釋中攝取を明すとも猶これ抑止中の攝取である、故に若造還攝得生と謗法得生を許すけれども、果中猶抑止を存して華內の三障を談じてある、これは觀經の善惡因果配立を解する疏であるからぢや、大經は逆謗未造の故に唯除と抑止し、觀經は五逆已造の故に攝取と說くのである。巒師は所被

散善義の逆謗除取

の機に付て具不具を以て除取を辯じ、終南は攝化の方便に就て未造已造以て攝抑を分つ、釋相別なれども廻心皆往の義旨は同じである、故に巒師は讃に偈唯除逆謗の文を頂禮し、論註口業功德には謗法往生を許し、終南は事讃に謗法闡提回心皆往と云ひ、散善義下輩總讃文には四重偸僧謗正法、(中略)、一念傾心入寶蓮と讃し給へり、因みに五逆に大乘の五逆小乘の五逆の釋あることは、信卷末に溜州の釋を引くが如し、大乘の五逆中には謗法も攝含してある、この時は願文に五逆謗法とあるを總別幷べ擧げたものと解す。

第十九願鎭西義

第十九願、　鎭西義

願名と願體

願名と願體、願名、來迎引接、願、聖衆來迎ノ願、臨終現前ノ願と名く、願體は來迎引接である、修諸功德は來迎の所由である。

願由

願由、　第十八願に生因を願するも、若し這願の來迎增上緣がなければ、臨終の時恐くは、諸邪業繫障礙し、三愛現前し、天魔競ひ來りて惑亂するからである、則ち若不生者は得生の因で、此願は他力の增上緣である、因緣和合して往生を得るのである、さて願の正意は念佛の爲めの來迎なるも、亦歸投するものあれば、諸行悉く捨て給はず來迎し

正念と來迎

給ふ、觀經上六品の萬行、這願の諸行、みなこれである、喩へば乘物を一挺拵らへ置て、これは親父を乘する乘物と定め置くも、時には老人の來客などあれば、馳走の爲めに乘せて送り歸へす樣なもの、さて來迎は正念の上の來迎か、來迎の上の正念かと云ふに、來迎の上の正念であることは、和語燈三の四十八、四の二十九、七の四十七、翼讃廿三の十四紙等で明かである、その和燈三の文に云く「稱讃淨土經にいはく、佛慈悲をもて加へ祐けて、心をしてみだらしめ給はずとゝかれて候へば、たゞの時によく〳〵申をきたる念佛によりて、臨終にかならず佛は來迎し給ふべし、佛の來迎し給ふを見たてまつりて、行者正念に住すと申す義にて候也」と、併し機類がいろ〳〵あるから一概出來ぬ、臨終廻心のものは、正念の上の來迎である、下三品の人はこの類である、亦平生廻心の機の中で上根久修練行のものは、正念の上の來迎、また下根のものは、平生隨分心行を具すと雖　病苦正念を得ず、佛慈悲加祐して正念に住し來迎にあづかるもの、或は下輩臨終夢見佛迎のもの、或は胎生のもの佛暫信を哀はれみて臨終現前し給ふを見佛して悔過往生するもの等がある、已上は持阿師の決疑見聞第三の本淨全一四二)、義山師の大經隨聞講錄に據る、さて臨終の善惡と、往生の得不に就て、鎭西、西山、眞宗の解釋には異同がある樣である、鎭西派祖聖光上人の念佛名義集卷下(一八頁)に臨終行儀を詳記して、而して云く、「臨終の吉き人は往生したると知る、臨終の惡きをば惡道に落ちたりと知る也、臨終善きと申すは、日來やむ病をも、とり直し不レ苦して心善く成りて手を合掌し居眠るやうにして、命終る時言ばには南無阿彌陀佛と申して死するなり、或は紫雲なんども聳き、光明を拜み化佛を見奉る、是は上品の臨終なり、是樣に居てこそ死すべけれども、乍レ寢寢入たる樣に念佛申して死するは往生する也、是はみな臨終の吉也、又臨終の惡き樣と申すは、臥しまろび、吐テ血ヲ狂ひ死に死する也、或は口に物も不レ云して死ぬものもあり、或は西と云はんとて東と云ふ、或は白しと云はんとて赤しと云ふ、斯樣に心迷ひ物云ひたがゆる人もあり、是は者三惡道に墜つる人也」と、勢觀房源智師の選擇要決に「當世流布の義は、往生の得不を判定するに、臨終の正不を以てせず、唯自義に契ふを正しとなし、他解に隨ふを以て邪となす、これに由て先賢の往生を肯はず、當機の靈瑞を貴ばず、是れ何の僻見ぞや、かくのごときは聖敎に文據なく、紀

臨終の善惡と往生の關係

鎭西

傳に蹤跡なし、凡そ臨終の善惡を以て、當生の苦樂を定むること是れ如來の金言なり、誰れ人か之を疑慮せんや」とある、尙西宗要卷四臨終行儀事、念佛名義集卷（淨全三八一頁）等參照の事。

四山　西山明秀師の愚要鈔中の一一紙に云く「決定深心の證得往生の人は、臨終の惡相には障礙せらるべからず、然るに善惡の相は平生臨終ともに皆是機情の上にうかべる假相也、宿業厚き人は生の時も同く柔善の相を示す、又宿惡の多き人は自然に麤强の色を顯す、其中に多くは麤心麤惡を以て體としたる凡夫なる故に、生々世々に散動の根機たり、就中此度の臨終は、未來世まで煩惱惡業を殘しとゞむる事なくして、皆今はたし盡す故に、殊更今の臨終が死苦重かるべし、然れども證得往生の心體は、是等の假相に障へられずして、速に極樂の寶國に往生すべし」とある。

眞宗　眞宗、平生業成にして、臨終の善惡は何等往生に關係はない、安心決定鈔末の三九紙に、「正念往生、狂亂往生、無記往生、意念往生の四種往生を明し、亦口傳鈔五四紙には、水刀々劍寢死々緣無量を明し、同五七紙には「未來の生處を彌陀の報土とおもひさだめ、ともに淨土の再會うたがひなしと期すとも、をくれさきだつ一旦のかなしみまとへる凡夫としてなんぞこれなからん、なかんづく曠劫流轉の世々生々の芳契、今生をもて輪廻の結句とし、愛報愛著のかりなやと、この人界の火宅出離の舊里たるべきあひだ、依正二報ともにいかでかなごりをしからざらん、これをおもはずんば凡衆の攝にはあらざるべし、(中略)、淨土往生の信心成就したらんにつけても、このたびが輪廻生死のはてなれば、なげきかなしみもとゝもふかゝるべきについて、あとまくらにならびゐて悲歎嗚咽し、ひだりみぎに群集して戀慕涕泣すともさらにそれによるべからず、さなからんこそ凡夫けもなくて、殆ど他力往生の機には不相應なるかともきらはれつべけれ」とある。

諸行報土得生　發菩提心修諸功德、　來迎の因由中、這二句は起行で、至心發願等の二句は安心である、發菩提心起行のことは、宗家大師の上品下生の但發菩提心の釋、元祖の擇集三輩章に菩提心等ノ餘行とあるにて知らる、修諸功德とは這中に念佛及び餘行がある、これが來迎の因由である、念佛は生因の行であるから、無論報土に往生す、諸行は非本願なれども、攝機の願に乘じて報土に往生すと云ふ、良忠師の決疑鈔卷二に「元祖傳で云く、若人諸

諸行往生に就き違理違文の問答

行皆本願の行なりやと問はゞ、答へて言ふべし爾らず、若人諸行往生の時皆本願に乗ずるやと問はゞ、答へて言ふべし、唯然か也」と、東宗要卷三には、諸行各生報土の文證として、觀經の三福業淨業正因、金剛般若經の一切善法無」非」佛因」隨願經の萬行皆生、大經の三輩、觀經の上六品、玄義分の廻斯二行求願往生、般舟讃の萬行俱廻皆得」往の文など、約二十個の文を出し、更に違理の難、違文十二の難を出す、今問答體にしてその大要を出す、

問、本願所成の報土に非本願の諸行生せざるべし。

答、善體は眞善妙有の故に得生す、(眞善妙有の説明は淨土宗要集第二見聞、淨全一五一頁に出づ) 若し之を攝せずば佛に攝機未盡の失を成す、已上違理に就て、已下違文に就ての問答、

問、(一)、小經の少善不生の文に違す。

答、諸行不堪の機の爲めに、念佛を勸めんが爲め不生と云ふ、故に大師は恐難生と云ふて、少分往生を許す、

問、(二)、禮讃の千中無一の釋に違すべし、

答、それは不至心の機なり、諸行堪能の機には、一二三五の往生を許す。

問、(三)、定散料簡門に、定散の機みな十念の佛願に乗じて生ずと云ふに違す。

答、隨自の一機に就て、散中より念佛を別開するもの、不」然れば、單行世福廻亦得生の文等と牟楯す。

問、(四)、就行立信中の順彼佛願の信なし、

答、所信の行には正雜の勝劣あるも、能信は通じて往生の利益を信ずるのである、故に往生行雖」多大分爲」二等と云ふ。

問、(五)、攝取の光益を蒙らざるが故に、

答、諸行は本願の行に非ざるが故に、攝取の義なしと雖、得生の益ある事は、定善義備修衆行等の問答中に顯はれてある。

問、(六)、失此法財の行なり、

答、今時不堪の機に寄せて、聖道門を嫌ふ語でありて、依下觀門等とは、淨土門を勸む

るのである。

問、(七)、自力雜毒の行、これ必ず不可也と嫌ふ。

答、念佛諸行を論せず、不眞實の心を以て行するを、虛假の行と嫌ふのである、其旨選擇集、並に上人消息等に見ゆ、

問、(八)、般舟讃の悉是念佛往生人の釋に違す、

答、多分に約し、本意に約して爾か云ふなり、

問、(九)、論註の同一念佛無別道故の文に違す、

答、かの文は彼土の相で、此土の行ではない、小經に皆悉念佛と云ふ、彼土の相である。

問、(十)、感師の萬不一生の釋に違す、

答、それは不至心に約して之を嫌ふのである。

問、(十一)、感師の七義勝の中、生迎の二勝なしと云ふの文に違す。

答、萬行みな往生の行であるけれども、念佛は勝行、勝來迎、諸行は劣行、劣來迎、亦生勝の生は、若不生者の生で生因行を意味す、諸行不生と云ふに非ず、故に擇集に、「依

懷感禪師ノ意ニ、往生之行雖ヘ多束而爲ヘ二、一ニ謂ヘ念佛往生、二ニ謂ヘ諸行往生」と、

問、(十二)、選擇集廢立爲正の義に違す、

答、爲正は餘ノ二義を傍とするの意、諸行を廢するは、非本願の故である、不生と云ふではない、故に大經釋には、但念佛、助念佛、但諸行往生を明す。

至心發願欲生我國、　三心中前後を擧て中間の深心を略す、又前後の二心は深心より生ずるから別說せず、全體信樂なくして至心發願すると云ふことはないから、今擧末攝本である。

大衆圍繞現其人前　隨聞講錄云く「菩薩及比丘衆なり、僧衆の多少は行者所修の功德ほどに來迎あるべし、喩へば世間にて親の遠方行きしを其子供が迎に遣すが如し、其の親父が至極陰氣にて諸事かさ高に無きものなれば漸一人遣す、これは今念佛の功の少き人の如し、又先きより少し重々しき氣質なれば手代一人も添て遣はす、これは念佛の功前より多き人也、又特の外にむつかしき氣質なれば、家内が皆迎に往く程の事なり、是は三萬六萬已上の人也、上來は皆念佛に就ての事也、又餘行も爾なり、念佛の親父でな

けれども、先様が萬善萬行を修するは、これ至極俸祿もある也、又大身にてあれば、左様なるは迎も亦澤山にやらねばならぬ也、兎に角衆の多少は行者の所修の功に依るべし」と、現其人前とは二藏義二十四に云く「現前と來迎」謂く來迎の言は事相に依る、即來迎は不來にして而も來、不迎にして、而も迎ふるを現前と名くる也、言こゝろは報佛の自體は元來不動にして去來なし、不信のものは感ぜず、有信のものは感見す、此時佛現前するを來迎と云ふ也」とある。

第十九願四山義

派祖の要釋鈔

第十九願、　西山義

派祖の要釋鈔に云く「發菩提心ト者即便往生ナリ、修諸功德ト者當得往生也、至心ト者至誠心ナリ、發願ト者深心ナリ、欲生我國ト者廻向發願心也、是レ即便往生也、從臨終壽時假令不與大衆已下者當得往生也。

發菩提心は歸命發願心の安心なるが故に、平生即便往生とし、修諸功德は起行の正行門にて臨終に至るが故に當得往生と云ふ、助正の時は回向を用ゆるも、起行の時は安心に具したる阿彌陀佛者即是其行の行なれば廻向を用ゐざるなり、至心者至誠心ナリ等は文解し易し。

於二十九ノ願一再ヒ明ス二即便當得一ノ往生一ヲ故者、就テ之有リ二九品一ニ二重ノ義一、一者下輩ヲ爲シ二十八願一ト、善ノ九品ヲ作リテ二智慧一ニ云ヒ乃至十念ト、惡九品ヲ造リテ二慈悲一ニ云フ唯除五逆誹謗正法ト、二者上五品ノ往生者、來迎ニ有ニ無數千五百之不同一、佛來迎シ而述ヘ二本所修ノ善根一ヲ、論シテ華開ノ遲速ヲ、造ル二修因之功一ヲ、是レ非ニ他力往生一ニ、偏ニ念ニ修因ノ功一ト、然ルニ此ノ上五品ノ修因ノ往生ト、與下逢フテ一善知識一聞キテ二四十八願一ヲ而往生スル上、俱ニ於二中輩ノ內一ニ開レ之者、上五品修因往生ハ皆遇フテ二善知識一聞キテ願ヲ而欲ス下作ル二一人ノ往生一ニ不ル令中シメ二人ヲシテ往生上故、上六品ノ結品ニ說ク二善知識一ヲ、以テ此義ヲ一十九ノ願ニ再ヒ明ス二即便當得一也、發菩提心修諸功德ト者、上品也、至心發願已下者、中品下生也、故ニ即便當得ヲ再ヒ置ク一願ノ中一ニ者、雖ニ機ヲ分ツト九品一ニ、來迎ハ唯一ニシテ而欲レ顯サント往生無キ「ヲ二、此ノ故ニ中品下生ニ不レ說ニ來迎者、上五品ノ來迎、即チ中品下生ニ欲レ令レ知ラ中聞キテ二善知識一ニ四十八願一ヲ而往生スル「ハ此來迎上ナル「ヲ。

第十八願で、善ノ九品、惡ノ九品、即當二往生を明し、今亦十九願で、即當二往生を

明し、發菩提心修諸功德の上五品の機を、至心發願已下の中下品ノ聞已往生の一機とする事は、上六の善機を惡の一機とする意でありて、文に修因往生と云ふは智慧の位である、這人みな四十八願を聞て往生すと云ふので、二機往生ではない、聞已往生の一機と云ふ事を示す、隨つて上五品の來迎、卽中下品の來迎であるから、中下品には來迎を說かぬのである、鈔文に「念ニ修因ノ功一」の念の字は爲の誤字歟。

問ッテ云ハク依リテ發菩提心、修諸功德等ノ善根一、彌陀來迎ス、無ク シテ衆生ノ行功一而、豈ニ感一此佛ノ來迎一乎。

文解し易し。

答ヘテ云ハク住立佛ヲ納ムル華座觀一ニ者、來迎ヲ爲スナリ因行一ト、若シ衆生ノ往生ノ因行ノ上ニ見佛ヲ者何ヲ以テ納ノ華座一ニ乎、如シ上ノ中品下生一ニ、四十八願ノ之外ニ不レ說ニ來迎一ヲ者、來迎卽出離ノ行ナルカ故也。

華座觀の住立來迎佛は、阿彌陀佛者卽是其行、卽出離の行であるから、中下品に四十八願の外に來迎を說かぬのもこのわけであつて、四十八願卽來迎である、衆生が南無阿彌陀佛と稱したる因行で見佛するのではない、全體事相では除苦惱法は、住立の佛體が、華座の觀法かと云ふに、華座と云ふ時は平生の安心にして、住立の來迎佛を收めて證得往生を造る、そは平生に行を修して臨終來迎を期する故に、住立佛を華座の安心に收めて、來迎の因行を造る、其れが臨終に約しては三尊の立撮卽行である、されば今は衆生の因行に依らず、華座卽來迎を明したるものである。

明秀師の十九願釋

此ノ願ニ有リ地觀之意一、定ニムル身土一ヲ可レ有ニ來迎一也、九方ノ土ハ是レ非ニ淨土一ニ、非ニ他力一ニ故ニ、定ニ別所求之土一、可レ有ニ來迎一也。

地觀で別所求の土を定む、別所求の淨土は他力なり、來迎の佛體なり、餘の九方通所求の土は自力なり、穢土である、故に此願に地觀の意がある。

明秀師の鈔に云く、「是ニ有ニ二意一、一者卽便往生ノ來迎、如ニ大經ノ三輩一、二者當得往生ノ來迎、如ニ觀經ノ九品一、卽便往生ノ來迎ト者平生ノ證得也、上ノ願ニテ發ニ至心信樂欲生我國一ト、三心ノ上ニ成スル乃至十念一ト行體是也、第七觀ノ住立來迎ヲ、釋ニスル彌陀應聲卽現證得往生一ト卽此意也、當得往生ノ來迎者臨終ノ所現也、九品ノ無數千五ノ聲聞比丘等ノ聖衆是也、然ルニ今十九來

迎ノ願ニ不レルハ出ニ阿彌陀佛一ヲ、上ノ願ノ時證ニ得乃至十念一故也、是一向專念ノ自來迎接ノ貌也、即爲ニ念佛三昧ノ位一、聖衆來迎ハ隨ヲ機ノ根性一現ニ色相莊嚴ヲ來迎ナル故ニ是ヲ云ニ大衆圍遶一、是レ觀佛三昧ノ位也。

即便當得の來迎

第十九願ノには來迎を誓ふたもの、然るに來迎に平生即便往生の來迎と、臨終當得往生の來迎の二あるのである、併しこの二は一人の始終にして、即當一致でありて、行者より云へば往生、佛より云へば來迎である、その即便往生の來迎とは平生の證得往生で、三心領解證得往生の上からは萬法悉く南無阿彌陀佛、口に唱ふるも南無阿彌陀佛、意に念ずるも南無阿彌陀佛、身に振舞ふも南無阿彌陀佛、三業さながら南無阿彌陀佛、この見地よりすれば、山の三角彌陀の三尊、松吹く風も聖衆來迎と味得せらるゝが、即便往生の來迎である、當得往生の來迎とは、平生の證得往生が、臨終に實現せるものでありて、九品段に說く無數千五百の聲聞比丘の聖衆來迎である、前者は一向專念自來迎接、念佛三昧位、後者は機の根性に隨つて色相莊嚴を現する臨終來迎、觀佛三昧位である、全體來迎の所談に三重がある、一には觀佛三昧位、三尊來迎、二には念佛三昧位、三尊即一佛、上記即當來迎の如し、三には獨一顯現の來迎、除苦惱法の敎をも離れ、機の造作をも離れ、離敎離機獨一顯現の彌陀

來迎の三重

捨本願捨大悲

「釋迦も招かず、韋提も呼ばず、誰れを格氣で來たかいな」の俗謠ある如く、派祖以來の書に之を捨大悲捨本願離機離敎獨一顯現の體と云ふ、捨大悲捨本願とは、融舜師の觀經厭欣鈔に、第七觀の疏文を解して「問の意、韋提の前に住立し玉ふ佛は、本願を捨て來と見て問したり、答も本願を捨て來るを如來の意密と云ふ、その故に本願に十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺と誓ひ玉ふ所に、今此ノ機は至心もせず、十念もせず、すでに三惡火坑に只今墮する機分なり、爰に彌陀の立る所の本願を捨て、三心をも聞ず、三福大悲門の修行をも作ず、造惡の機の分を來て立撮即行し玉ふ無緣の大悲深重の佛なり、故に淨土の法門には、敎門の三心を開て往生を勸むと雖、敎外の實義を云時は、不聞不知三惡墮在の機を、佛の方より來て攝取し玉ふ佛なり、如ノ此攝取し玉ふ彌陀因位を尋るに、十方衆生若不生者不取正覺と誓て、既に正覺の告を得て、佛と衆生と同時に往生の義、十劫の昔成する故

なり、其時同時正覺の文證に、蓮華と云ふ草始めて出生するものなり、爰を以て「如是妙華ハ是本ト法藏比丘願力所成と說ける、此草を以て佛與二衆生一同時正覺を得る、三千草萬木の中に、華と果と同事なるは是に限れり、是同時の正覺なり、又蓮は佛の正覺の體、華は因分我等衆生なり、これ佛與二衆生一因果不二一體の義を表するなり、是を安心したるを願行具足の體と云を聞けば、聞さる以前に佛衆生一體に正覺を成す、此重を中なる蓮の子に譬ふなり、是れ佛の正覺の體なり、これ十劫正覺に衆生も聞ざる以前に、佛果に衆生往生の義ある姿を蓮肉の子を破てみれば、青き葉のあるに譬ふなり、此蓮す昔しより有と雖ども水に植ざれば生ぜず、衆生往生有りと雖ども、佛の正覺に成して安心の潤ひに依ざれば生ぜざるなり、又古き物の種子は年久く成れば成長せず、此の蓮の子は久く成ると雖ども、潤ひて依なり、十劫の昔古き往生の種子なりと云へども、曠劫流轉の今、宿善安心の潤ひに依て正覺の華の開るなり、又根本今の彌陀の正覺は何くより生ずと云へば、十方衆生所覺の法として、衆生の三毒煩惱の濁水の上に成ずる正覺なり、此の意を以て今に此の蓮華濁水の游泥より生ずる、是衆生の惡業煩惱より生ずる佛の正覺の姿なり、如「此しれは此華佛には正覺の姿をあらはし、衆生には往生の覺體なり、(正覺の成し菓みを種として、心の水の華ぞ開くる)、(水の華開てみれば正覺の、成し菓みは菓なりけり)、煩惱惡業の濁水に他力安心の清水を入るれば、清淨の心水となるなり、是を序分には、不清淨の機の上に、清淨の法を宣說し給ふと云へり、佛性論には、篠蟹乳に入りて呑ますれば、毒と成て人を殺す、又念佛三昧の智水に入れば、濁水變じて清淨に成なり、爰を以て本願他力の不思議を知るべし、今この觀の除苦惱法の除字に就て甚深の法門あり、本願の唯除五逆誹謗正法は抑止門、觀經の下下品は、五逆攝取門なり、但し本願の除の字の所に抑止と云ふ攝取の意ある故なり、「此世にて此世の物と見へぬかな蓮の露に宿る月影」、除と云は抑止の時は除て不「攝除」之、攝取の時は除くと云、佛體より衆生の方の五逆を除て攝し給ふが除也、爰ヲ以て當觀に住立の彌陀除苦惱法と現し給ふ、是衆生の五逆誹謗法を除く攝取門なり、如「此證得する故に、平生五萬劫の生死の罪を除き、必定して當生に極樂に生ずるなり」とある。

全體捨大悲捨本願を事相敎相に就て述べんに、事相に三重がある、

(一)、大悲は觀經、釋迦の佛語、本願は大經、三心十念、又大悲は十八願の十方衆生攝取、本願は觀經の佛語を、十七咨嗟に歸して本願とす、

今は大悲の敎、本願の機を離れ、三惡火坑の前に立攝卽行して、衆生の往生、佛正覺の體を成するを、捨大悲捨本願の來迎と爲す、

傳云、出息は釋迦、入息は彌陀、卽ち釋迦の佛語、彌陀本願の三心十念の機敎を離れ、三業の出入を離れ、十劫正覺の覺體を開覺すれば、釋迦大悲の出息の敎を捨て、彌陀本願入息の三心十念の機を捨たる俱時正覺の南無阿彌陀佛である、

(二)、獨一來迎、觀勢の智願と大悲とを捨て、我身佛體と顯れ、衆生往生佛正覺なるを、報身來迎、自來迎接にて唯慈悲獨一の來迎である、

(三)今は法界卽是彌陀國にて、一人成佛すれば、法界依正悉く成佛す、一塵一法、本迎の體ならざるは無いのである、故に獨一來迎に止まりてはならぬ、

要するに(一)(二)は二菩薩を捨たる獨一來迎、第(三)は三尊を捨て我身卽佛の位で

ある、之を法界卽是彌陀國と云ふのである、この三尊を開て、變相三十七尊とし、淨土の本家を、娑婆の本國に移したる、國中人天法界唯一佛の變作とする義が事相の義である、

又敎相より云へば、前述の如く、第七觀で、分別解說せざる已前、釋迦大悲の佛語に應せずして、空中に顯現するは、韋提未だ大悲の佛語を聞かざれば、本願三心の證得なし、這時に現ずる彌陀なれば、捨本願捨大悲と云ふのである、

古歌　詠人知らず

本願毛大悲毛捨而亦捨奴捨留裳捨奴時所幾爾計流、

○阿彌陀和土留土毛左羅爾奈加里計里本願大悲於寸天茂野爾志天、

○阿彌陀佛於餘所爾於毛邊波不往生和雅加倶太以爾美禮波來迎。

問此ノ願云レ不レ出ニスト阿彌陀佛一テ、義難レ思、第十八ノ念佛往生ノ願ナルハ極ニル名號一故ニ云ニ乃至十念ト一、第十九ハ成ニ來迎ノ體一ヲ本願也、既ニ云リ設我得佛一、又云リ與大衆圍繞等一ト、與者兼也、知ノ本願ノ意ハ若シ我レ成佛セハ必ス兼テ大衆ヲ共ニ來テ現ニト行者ノ前一ニ也、故ニ別願成就ノ三輩ニ各明タリ無

量壽佛與諸大衆現其人前ト、又觀念門ニ釋ノ此ノ三輩ヲ曰、一切衆生根性不同ニシテ有リ上中下ノ、隨テ其ノ根性ニ佛皆ナ勸ヲ專ラ念シニ無量壽佛ヲ、其人命欲スルレ終ントス時佛與ニ聖衆一自來テ迎接シ玉ノ盡ク得ニ往生ヲ、已上、然者此ノ願ニ在ニ彌陀來迎ノ體文理分明也如何。

問の文解し易し。

答誰カ云此ノ願ニ無トハ彌陀來迎ノ體、今所レ云法門ハ是隱顯互具道理也、自レ本卽便當得ハ異體ニノ而モ一法也、然ルニ四十八願ハ望レバ選擇建立之因位ニ雖ニ各別ナリト、約ニ果位之成就ニ時ハ互ニ表裏ヲ各成ニ其ノ一願ヲ也、就レ中十八十九咨嗟佛語ノ終窮也、故ニ從テ第十八願ノ、彌陀聖衆俱ニ自來迎接也、韋提見テ三尊ヲ同ク接ニ足スル見無量壽佛ト、是三尊一體ノ證得也、又從ハ第十九ノ願ニ彌陀聖衆ノ來迎也、開テ韋提見ヲ、說ニ眞身觀音勢至之三觀ト、是レ一體三尊ノ觀門也、此ノ二ノ來迎不離不卽ニノ而以ニ臨終平生一同ナルヲ故ニ云フレ與也、以ニ此義ヲ可レ知ル、三輩及ヒ觀念法門ノ文取リ合ノ十八十九兩願ノ意ヲ、明ニス卽便當得ノ二ノ來迎ノ意ニ也、三輩ノ文ニ云ニフ一向專念無量壽佛修諸功德願生彼國ト、平生ノ證得也、云ニフ命終時無量壽佛與諸大衆現其人前卽隨彼佛往生其國等ト、臨終ノ往生也、下ノ二輩モ如レ此、觀念法門ノ釋準レ之可レ知。

文解し易し、事相名目鈔(寫本)の三來迎と、今鈔の來迎談との交渉を一言せば、

事相名目鈔　今鈔

獨一來迎……獨一來迎……獨一來迎

機相應來迎……當得來迎……卽便來迎

念佛所具來迎…卽便來迎……當得來迎

この中機相應と云ふは、三心發得の機にして、無有出緣の機である、萬機一機の惡機である、この來迎を安心より見れば卽便、臨終より見れば當得、又衆生に約すれば卽便、佛に約すれば當得である、念佛所具も、名は體を顯はすとすれば當得、名卽體、名の外に體なしと云ふ所より云へば、念佛所具來迎は卽便來迎と云ふ事が出來るだらう。

問若シ然者第十八ヲ可レ云ニ來迎本願ト乎。

問の意は前文に從リ第十八願ニ彌陀聖衆俱ニ自來迎接也と云ふたからこの問が來た。

答法門無盡ニ互融シ、義理多端ニ轉變ス、依レテ之學者動スレハ及ニ迷亂ニ能思ニ忖其旨、如ニ上ニ云カ

雖レ有ニ四十八願一、以ニ十七十八十九一殊ニ爲ニ最要一、謂ル第十七ハ諸佛能讃ノ定散也、十八十九ハ文中ノ行體也、又是レ行者能解ノ得益也、又此ノ付ニテ能譬ノ位ニ有リ能歸所歸一、自ハ能歸ノ願心一、第十八十九共ニ平生ノ安心也、從ニ所歸ノ行體一十八十九俱ニ臨終來迎也。

第十七願ハ諸佛能讃ノ定散とは、第十七願は咨嗟能讃能詮の佛語で、十八十九は所詮である、之を佛體佛語の定散と云ふ、則ち能覺所覺生佛一體の彌陀佛體を、釋尊言說に定散二善依正二報等と開說したもので、彌陀佛體卽釋迦の佛語であるのを佛體佛語と云ふ、亦十六觀釋迦の佛語卽彌陀の名號佛體であるから、十六觀說の流通には、佛語阿難汝好持是語とある、之を佛語佛體と云ふ、但し西山派中、西谷流は釋迦の佛語に依らずば、佛體顯れず、觀門に依らずば、弘願顯れずと云ふ、深草流では多くは釋迦佛語より弘願に至るも、一機あり直接弘願に到ると云ふ、鈔文に「十八十九ハ文中ノ行體」とは、定散文中唯標專念と、定散の文を以て阿彌陀佛卽是其行の行體を顯はすとの意、鈔文に「又是行者能解ノ得益」とは、安心證得の上の來迎得益である、鈔文「付ニテ能譬ノ位一」の譬の字、異本の如く解の字にすると一層解し易し。

又能歸ノ安心ニ有レ三、自ハ至誠心深心一、三心共ニ平生卽便往生也、自ニリハ廻向心一、三心俱ニ臨終ノ當得往生也。

一安心中の三心を心行と、重位に配當したもので、一心二心より三心を見れば、至誠深心は安心で卽便往生、廻向心は起行にて當得往生、三重にては、一心二心よりは廢立、廻向心は助正にて、心行不離、卽當一致を、安心の下で論じたもの。又所歸ノ行體ニ有ニ自覺々他一、從ニリハ覺他大悲一、自覺々他俱ニ平生攝取不捨也、從ニリハ自覺ノ智門一、自覺々他俱ニ臨終來迎也。

覺他の大悲からは、機の差別を見ぬ故、平生攝取不捨と云ふ、自覺の智門よりは機に返り、本所修の善、三世諸善廻向、畢命爲期正行增進の故に、臨終來迎と云ふ。

然則チ卽便ノ安心ト、與ニ攝取ノ來迎一一味スル處ヲ、釋ニ南無者卽是歸命亦是發願廻向之義言阿彌陀佛者卽是其行以斯義故必得往生一、又當得ノ信心ト與ニ聖衆ノ來迎ニ一味スル位ヲハ、明ニ衆生憶念佛者佛亦憶念衆生彼此三業不相捨離ト、如レ此等ノ埒ヲ一一ニ具ニ證ノ持ツヲ爲ニ諸佛能讃ノ安心ト、如ニ彼ノ隨緣眞如一、又是等ヲ總ノ取ヲ得ニ一心專念彌陀名號一ト持ヲ爲ニ彌陀所讃ノ得道一ト、如ニ

彼ノ不變眞如ニ、以ニ此ノ二眼目ヲ爲ニ三昧ニ都テ無ニ亂想異念ニ之處ヲ、爲ニ廓然大悟得無生忍之貌ニ、故ニ此ノ二願ヲハ同ク可レ云ニ念佛往生ノ本願ニ也、同可レ云ニ來迎引接之願ニ也。

文に「卽便ノ安心與ニ攝取」等とは、卽便の安心とは言南無者卽是歸命の歸命發願の一心なり、攝取來迎とは阿彌陀佛卽是其行で、阿彌陀佛體卽衆生往生の行體、換言せば阿彌陀佛は、衆生より立言せば證得往生の行體、佛より立言せば攝取不捨の來迎である、文に「當得ノ信心」等とは、この三業不離の文は當得往生の證文に今は引てあるけれども。亦卽便往生の證ともなる事は、近くは散善義私記卷一の六紙の如くである、卽當一致一機の始終ぢやからどちらでもよし、文に「如レ此等埒一一具證」等とは、如レ此種々分類差別して一一に證得するは、諸佛能讃の佛語に對する觀佛爲宗面の安心で廣說の方である、亦略說一心專念等と證得するは、彌陀所讃の得道に對する念佛爲宗面の安心で略說の方である、前者は差別的の故に隨緣眞如に喩へ、後者は平等的の故に不變眞如に喩ふ、此の念觀兩宗を以て照境の智三昧として亂想異念ない處が廓然大悟得無生忍である。

以ニ是等ノ義ニ故ニ此ノ二願ヲハ同可レ云ニ念佛往生ノ本願ニ也、同可レ云ニ來迎引接之願ニ也、其ノ上ニ總ノ云レ之時ハ自ニ第一ノ願ニ四十八願皆無三惡趣也、自ニ第二願ニ四十八願皆不更惡道也、餘願以如レ此殊ニ此ノ兩願ハ酬因ノ正體也、念佛來迎互融ノ決レハ無生ノ益ニ也矣。

文解し易し。

次ニ十方衆生發菩提心修諸功德者、上ノ願ハ依レ顯ニ一向專念ノ々佛往生ニ、廢ニ菩提心等ノ諸善ニ、云ニ至心信樂欲生我國ト、今是ハ又顯ニ萬機攝取ノ來迎引接ニ故ニ擧ニ菩提心等ノ諸善ヲ、是ハ從ニ願力得生ノ上ニ廻ニ本所修ノ善根ニ以テ顯ニ十方衆生ノ根性不同ヲ也、是卽善惡萬機ノ上ニ各示ニ聖衆來迎ノ體ヲ、成ニ彼此三業不相捨離ノ義ヲ、傍正攝取法門也、其旨至ニ三輩及九品ニ分明也、云々。

第十八願を廢立重、第十九願を傍正重で解す。文解し易し。

問第十八願ノ至心信樂等ト、今此ノ願ノ菩提心トハ爲レ同トヤ爲レ異トヤ、答同異可レ隨レ時ニ、第十八ノ至心信樂欲生我國ハ、三心也、三心平生名號得生ノ信心也、是ヲ云ニ卽便往生ノ安心ニ、菩提心ハ向ニ臨終來迎ノ佛體ニ信心也、是ヲ爲ニ當得往生ノ安心ニ、雖レ然ト名號來迎ハ一法ノ上ノ名體

也、卽便當得亦一益ノ上ノ始終也、故ニ似テ異非レ異、似レ同非レ同、居ル願行具足發願ノ位ニ時ノ心ヲ名ク三心ト、拜スル願行具足ノ之佛體ヲ時ノ心ヲ號ニ菩提心ト故ニ、所詮ハ只是同ク願力往生ノ安心也、卽如ニ上ノ念佛來迎ノ同異ノ義ニ可レ知、問往生禮讃　引テ淨土論ヲ所レ勸菩提心ハ、與ニ今ノ菩提心ニ同乎、答彼ハ起行門化他大悲ノ菩提心也、謂ル證得往生ノ聖人出テ大慈大悲ノ門ニ誘ニ引ノ一切苦惱ノ衆生ヲ令レ發ニ厭離欣求之心ヲ、如ニ般舟讃ノ觀音ノ救苦分身平等化々得速送彌陀國ノ故ニ、起行門ノ時ノ菩提心ハ如レ常、云々、今是ハ俱ニ自證之得益ノ所ヲ云ニ三心ヲ菩提心ヲ也、其義如レ上、然ハ則チ此安心起行ノ二種勝法ヲ爲ニ三昧ト、畢命ヲ爲ニ一期人ヲ喩ニ分陀利華ニ、名ニ上々人ト也矣、次ニ常ノ義ニ云臨壽終時往生極樂願志勇猛精進ナレバ、必聖衆來迎ス、假令トハ者若也、云々。

文解し易し。

九品寺の義

九品寺立テ二類往生ノ義ニ曰ク、第十八ハ念佛往生ノ願、第十九來迎引接ノ願、第二十ハ諸行往生ノ願也、然ニ第十九ノ來迎向ニ第十八第二十ノ二願ニ也、其義三輩ノ經文ニ分明也、云々。

京都九品寺長西字は覺明、讃岐の人、伊豫守藤原國明の子、九歲で京都に上り、儒學を學び、十九出家、源空聖人に師事し淨土敎を受け、後ち俊芿律師に就て止觀を學び、佛法禪師に就て禪宗を傳ふ、然れども尤も淨土敎に意を傾けて研究し、出雲路住心と云ふものより、諸行本願の義を聞きて大に服し、京都九品寺に住し、諸行本願の義を主張し、九品流と稱す、門下大に興る、讃岐西三谷に一寺を開き、同地方に法化盛んなり、示寂の年月日缺く、門下上衍證忍九品寺の後を繼ぐ、著作五劫思惟諍論章がある、又門下證空理宗の二人の間に法藏比丘五劫思惟に關し、唯思唯行の諍論あるを判し、修行思惟兩具するものなりと云へり、淨土傳燈錄、淨土總系譜、日本佛家人名辭書に據る。

西谷ノ相傳ニ曰ク、於ニ定散ノ諸善ニ、雖レ有ニリト廢立助正傍正ノ三義ニ、俱ニ非ス生因ノ善ニ也、云々。定散諸善とか、諸行とか云ふ時は行善の名にして自力廻向の目なるが故に、隨緣雜善恐難生で、非ニ生因ノ善ニ也と云ふのである、云ふまでもなく、諸行は獨り往生せず、佛の本願でないから、生因ないからである。しかし念佛行の爲めに住持せられて往生を得る、之を正因の上の正行と云ふのである、念佛は能成、諸行は所成、念佛に

成せられて諸行みな往生の業となるのである。全體定散には、機情の定散、佛意の定散がある、機情の定散とは、定散兩門各別、各守一隅故有上小利である、若し弘願の一門に歸入すれば、定散全く名號にて一一の行體みな無上大利でありて、孝養卽往生の直因、不殺卽往生の直因、善導大師孝養世善の一科に卽有二其四一と釋されて、淺き未入佛法の世善に、已入佛法の二福、却て未入佛法の世善に同じで、三福ともに願力に依りて、往生の生因となることを顯はしてある、全體が願力生因であるから、三福無功である、三福無功であるから、三福無分のものも、亦往生が出來るのである。

第十九願眞宗義

願名

第十九願、　眞宗義

願名　高祖化卷に五名を出し給ふ何れも願意を竭くす、若し十八の念佛往生願に對せば修諸功德願と云ふべく、二十の不果遂者ノ願に對せば現前導生ノ願と云ふべく、又十八の至心信樂二十の至心廻向に對せば、至心發願ノ願と名くべきである、發菩提心の句あるも願目とせぬは二由がある、一には三願の別を顯す事能はざるが故に、二に二力の分齊を知らしむる事能はざるが故である、立願の所由、三願各生に約すれば十九二十の兩願は並に方便攝機を立願の所由とする、卽ち弘願眞實に直入し難き未熟の衆生を攝するためである、於中十九願は定散諸行に蒙らしむるので、餘行は固より往生の因種ではないけれども回向願生すれば化土往生を許す佛意聖道諸行の機を誘引する爲めである、故に願文に雜行を擧ぐるは卽ち心を轉じて行を轉ぜぬ相である、然に釋尊一歩を進めて觀經に於ては既に心を淨土に轉ず行をも亦淨土は轉すべしとて、聖道八萬四千を定散二善に攝し來りて、其定善には彌陀正行觀を以てしてある方便誘引の巧手段である、「和讃に至心欲願欲生と、乃至、定散諸機をすゝめけり」、若し三願轉入に約せば十九二十同く宿善を成するを立願の所由とする、弘願に達するには必ず要眞二門を經來るのである、從令現在直入の機と雖之を過去に求むれば諸門みな具す、三願轉入法理必然であるから、經には若人無善本等と云ひ、釋には過去已曾修習之法等と云ふ一切の善法みなこれ名號の分離なるが故に必ず入弘の階梯となる、故に宿善に四句分別が立つ、一遠にして遠な

立願の所由

るは世善、二ニ遠にして近なるは聖道門、三ニ近にして遠なるは要門、近にして近なるは眞門である、その要門に四法がある、一に敎とは方便敎觀經顯說で本願では第十七願ノ一分である、三願の機一の十七諸佛讃嘆の佛語を聞受するも、機緣に生熟あるから同聽異聞する、萬行圓備の名號讃嘆を聽いて萬行に力を入れると十九願の機となり、萬行圓備の名號ぢやから勵んで稱へねばならぬとなると二十の願となる、萬行圓備の名號ぢやから機は無作也と領解すると十八願の機となる、二に行とは發菩提心修諸功德定散三福九品諸行である、化卷本云々、三に信可」知、四に證化卷云々、十九願成就を指示して三輩九品を擧げ、次で見道場樹ノ願、得三法忍ノ文、邊地胎生懈慢界ノ文等を出す。

願體　聖道門の行者始めて淨土門に轉向し、定散諸善を修して往生を願求せむと欲するに、諸善を修すと雖、三心を發さゞれば淨土の因法と成らぬから、佛は修諸功德に至心發願を附して立誓し給ふたのである、讃に「至心發願せるゆへに往生淨土の方便の善とならぬはなかりけり」とある、生因に行あり信あり、一を採り一を闕くこと出來ぬ、二法辨取して願體とすべきである、なぜと云ふに要眞二門は行信相扶でなければ尅果の用がないからである、但し行信相由りた處で一因になるのであるから二因一果ではない。

發菩提心　安心でない起行である、これ修行の初入萬行の元首であるから別して之を擧げたのである、三論宗より入るものは、三論宗の菩提心を往生の行とする、天台宗より入るものは、天台宗の菩提心を往生の行とする、修諸功德に望むれば心行の差別あれども、三業を總じて行門と判せば發心も亦起行の所屬である、例せば五念門中の作願の如きである、故に釋集三輩章付屬章等には起行と云ふてある。

修諸功德　讀んで字の如くである、さて這語中に彌陀念佛入るや否やに就て古來有無の二大學說がある、今その主張點を問答體にして述べてみる、

修諸功德中に彌陀念佛有無

問修諸功德中に彌陀念佛有無の主張者氏名を出せ、

答修修諸功德中に彌陀念佛ありと云ふは大谷派の慧空師、本派の道隱石泉月珠義山師等である、亦修諸功德中には彌陀念佛なしと云ふは明敎院快樂院勞謙院專精院等である、但し各師それ〴〵立義推論には多少の相違特殊點があることは、本典一滯錄略讃述聞對問記敬信記摘解等を披き看るべきである、シカシ明敎院は如來會を講じた時は修諸功德

中に念佛なしとし、後觀經を講じた時には念佛あることを許容した、前說は異譯の因願を對照して論じたのである、卽ち吳譯の第七（正依の第十九に恰當）には一心念とあり、又漢譯の第十八（正依の第十九に恰當）は常念我とある、是等異譯によれば諸行中に念佛あるが如し、又正依及如來會に依れば、第十九は諸行往生、第二十は自力念佛往生と明に諸行念佛の區別がある、そこで其相違を會して、吳譯漢譯は能修の人に約するが故に、諸行と念佛とを混交し、魏譯如來會は能修の法に約する故に、諸行と念佛と判然せりとて修諸功德中に念佛なしと云ふ、亦師の後說は觀經の說相より沂りて見たものである、卽ち三經往生文類に萬行諸善の自善を廻向して淨土を欣慕せしめ、或は自力の稱名念佛を說きて九品往生をすゝめ玉へり等とある文、及び化卷に此願成就文者卽三輩文是也觀經定散九品之文是也とあるより、觀經と第十九願とを考察して十九願に念佛ありと云ふ、けれども十九願は諸行を正とし自力念佛を傍とする故、願には自力念佛を出さず三經往生文類には或は自力の稱名念佛と或の字を冠すと云ふ、已上兩說中前說誤にして後說を正と訂正せられた、但し師は諸善萬行中の念佛を他流の人の如く萬行隨一の念佛とは取らぬである、故に能

修諸功德中に彌陀念佛あり と云に九問九答

修の機に約すれば十九願に諸行念佛あれど、法に約すれば十九願は單諸行となるのであるから、略讃にも明敎院の義は修諸功德中彌陀念佛なしと云ふ說として評してある、詳しくは敬信記可ㇾ看、

修諸功德中に彌陀念佛ありと云ふ說に就て、

問修諸功德中に彌陀念佛ありとは難二首肯一元來十九願の修諸功德はこれ雜行で正行ではない、故に和讃に諸善萬行ことゞく至心發願せる故に等と云ひ、亦淨土の行にあらぬをばひとへに雜行と名けたりとある、何んぞその中に彌陀念佛ありと云や、

答修諸功德卽雜行に非ず、雜行は正行に對する、諸善、萬行、諸行、諸功德の語は正雜を包容して居る、修諸功德は寬、雜行は狹である、

問然らば化卷本に、於二淨土ノ一切諸行一綽和尙ハ云二萬行ト一導和尙ハ稱二雜行ト一感禪師ハ云二諸行とあるは云何、　答嚴密に云へば語に寬狹あるも大體より是一と云ふ例はいくらもある、例せば擇集二門章に難行易行聖道淨土其言雖ㇾ異其意是同と云ひ、本願章に撰擇攝取其言雖ㇾ異其意是同とある如き、語に寬狹あるも是一と云ふ如きである、

問二卷鈔に第四稱名を眞門念佛としてある、然るに萬行隨一の念佛を立てゝ觀經顯說下三品を判するもの祖判に違するではないか、

答二卷鈔に第四ノ稱名を一向專修と判したは化卷の唯稱佛名に同致せしめたもの、若しこの念佛にして前三後一の助を假らば要門假門にして矢張り十九願所屬となる、全體十九願には定散各生と助正兼行との二機がある、定散各生とは化卷に所謂五專でありて、此中の第四の稱名は萬行隨一で未だ助正の心得に至らぬのである、五行各々均一に生因に擬する觀經當分の說相にして假門の所攝十九願の所屬である、二に助正兼行とは、僅かに助正の心得は出來たれども前三後一を以て念佛を助成して漸く往業を成する、禿鈔の六種兼行で尙これ方便假門の所攝で二十願の眞門には攝め難い、

問化卷眞門下に若人無善本等と宿善念佛すら尙二十願の所屬としてある、してみれば順次往生の爲めの念佛、二十願に屬すべきではないか、

答宿善念佛をも眞門に屬すと云ふのではない、眞門順次往生の念佛も十八願の爲めの宿善になるぞと云ふ義を顯はして眞門下に宿善の沙汰をし給ふたのである、

問禿鈔小經勸信下に專修五種也と註してあれば、專修五種は十九願開說の觀經に非ずして、二十願開說の小經位なるべし、

答問者提擧の文は小經の當分を云ふのではない、專修の言は五種正行の邊ありと談じて下就行立信の本を張るので、爰で五行各生位、及び助正兼行を判じ給ふは矢張り觀經位である、

問小經の不可以少善根得生、終南の隨緣雜善恐難生とある、此中に彌陀念佛をも攝するや否や、若し攝すと云はゞ廢立成せざるべし、若し攝せずと云はゞ十九願中に彌陀念佛なかるべし、

答少善根中に萬行隨一に位する彌陀念佛をも攝するから安心決定鈔末には隨緣雜善を釋して「たとひ念佛の行なりとも自力の念佛は隨緣の雜善にひとしかるべき歟」と云、併し一向專修の眞門に比すれば萬行隨一位の念佛は所廢に屬するから廢立は成立する、

問二十願の如きは敎頓機漸で、法は非定非散の名號なれども、定散間雜の心を以て己が善根と認めて機漸を帶ぶるから自力となる、故に眞門と眞の名を與へて實の名を與へぬ

敎頓根漸のわけである、十九願の修諸功德中に念佛ありと云はゞ、其念佛は選擇本願の行であるかドーカ、若し選擇本願に非ざる念佛と云はゞ、論釋何れの所にソンナ明判がある、して看れば選擇本願の念佛と云はゞ萬行には攝せられぬであらう、

答敎頓機漸の語は自力念佛の全相を盡すの語ではない、尙餘多の自力念佛がある、眞門中にも定散專心と定散雜心とがある、敎頓機漸とは定散雜心卽ち行專心雜に名けし法目にして、定散專心の如きは敎頓機漸中にはいらぬのであるから一概に論斷は出來ぬ、

問散善義就人立信中第三疑難の所に專心念佛及修餘善とあるを、第四信下に承けて、觀經位の所にも同じく專心念佛及修餘善と云ひ、小經位に來りて彼專心念佛を二つとして專念專修と別ち、終に一心專念彌陀名號等と云ひ、之を就人立信と名け、之を承け來りて就行立信に專修五種を明してある、して看れば專修正業の念佛は及修餘善の雜中に攝むる事出來ざるべし、

答成程及修餘善と專念專修と分ち給へども、其正行の自力の邊は定散各正位と助正兼行位とありて尙要門中の攝屬なる事は如二前辯一である。

修諸功德中に彌陀念佛なしと云ふ十一問答

問二卷鈔に觀經往生を釋するに卽便二往生を開き、卽往生は難思議往生隱彰の實義であり、便往生には一には雙樹林下往生觀佛爲宗の位と、二には難思往生下三品の念佛位とありて、觀經下三の念佛は眞門往生と判して、要門雜行中にはないではないか、

答二卷鈔に觀經中に難思往生を開き給ふは、下三の念佛を指すのではない、此經三願轉入の意を佛意に存し給へるを顯はすもので、卽ち機の生熟に隨て要門諸行の機より弘願念佛に達せずして中間に止る機がある、之を一向專修の眞門難思の位なりと判じ給へるものである。

問修諸功德中に彌陀念佛なきと云ふ說に就て

答第十九願に所謂修諸功德はこれ雜行でありて正行でない、何を以ての故に、これ至心發願の行なるか故に、和讃には「諸善萬行ことゞく至心發願せるゆへに往生淨土の方便の善とならぬはなかりけり」とあるこの中に彌陀正行念佛のある理由はない、

問十九願は唯雜行に局りて正行に通ぜずと云はゞ、觀經の中十九願は唯上六品に局るべし、又大經の三輩も局て十九願成就とは云はれぬであらふ、して看ると高祖化卷に「此ノ願成就文者卽三輩ノ文是也觀經ノ定散九品文是也」と、上六品も下三品もみな修諸功德の願成就とするのと相違するのではないか、

答三輩の如きは固より廢助傍の三義を具するから、縱令助念佛を以て假りに所難者の如く十九諸行中に攝すとするとも、廢立の義が三輩にかゝるから局りて三輩を十九願成就とは出來ざるべしの文難は出て來る、して看るとその難問は的切妥當でないことは知られる、今會して云く三輩には廢助傍の三義かゝるけれども、說相の主とする所は十九願である、故に但諸行の義を取りて十九願成就としたもの、その助念佛の如きは二十願成就とする思召ぢやから、修習善本の文を以て眞門下に引き給ふてある、又觀經の如きは從假入眞の義を存するから、十八十九二十の三願を含攝して居る、であるから因を論ずれば正助雜の三行があり、果を論ずれば亦卽便の二往生がある、二往生とは卽ち三往生のことである、故に二卷鈔卷末には便往生に就て二種を開てある、故に觀經の上を細かに行體を調べその所屬を論ずる時は、或は十九願に屬するもあり、或は二十願に屬するもあり、或は十八願に屬するもある、この隨機方便の說相は、喩へば白兵戰の臨機應變その常相なきが如くである、又三願の分齊を詳かにしその所屬を論ずるものは、隊伍を整ひ所屬部署を分つが如くである、故に觀經の上は一概に定め難い、其物柄より云へば互に入り込んである、爾るにその說相は何に願の說き振りかと云ふに、十八願にも非ず二十願にも非ず、何以ての故に、諸行上座に居して念佛却て下座にあり、故に念佛その說相に打任かすれば萬行隨一に似て居る、要するにこれは彼の聖道自力の人の樂欲に隨ふて從假入眞せしめんと欲するが故に、二十願の行體を以て修諸功德の中に置いたもの、吾祖能く觀經の說意を得るが故に、觀經一部を以て十九願成就とし給ふたもので、說きし物柄が悉く十九願成就と云ふことには非ず、說き振りが十九願成就であると云ふことである、

問三願固より各別なる時は釋尊も亦差別して說くべし何そ之を混說するや、

答願文の解し方に二方面がある、一に願體差別門、二に攝化願意門、若し願體差別門に

約する時は、十九は諸行、二十は助正、十八は唯稱佛名、この法相は混じてはならぬ、若し攝化の願意に約する時は方便願中亦眞實を含むのである、何となれば眞より假を垂るゝものは固より從假入眞の爲であるから、從假入眞の爲めなれば必ず假の所に眞を含む、若し含まねばいつまでも轉入の期がない、故に化卷には「依レ此按二方便之願一有レ假有レ眞」との給ふて、十九願中にも矢張り眞實が含んである、故に善導は一一願言との給ひ、讃には釋迦は要門ひらきつゝ、乃至、すゝめしむと、十九願固より從假入眞の思召あるから、釋尊開說の觀經にも亦從假入眞の相を說くのである、釋迦敎の上より云へばひとへに專修にすゝめ入る、釋迦の手より若し功を本に讓れば假令之誓願良有レ由哉である、これは唯十九願のみでない二十願も亦然りである、故に化卷に「就二方便眞門誓願一有レ行有レ信亦有二眞實一有二方便一」とあり、亦果遂之誓良有レ由哉ともある、して看れば釋迦方便願を說く時は必ず從假入眞の願意を說かねばならぬ、然るに從假入眞一願を以ては成ぜぬ、若し一願にて足るならば、二十願は徒設となる、故に攝化の願意に約する時は修諸功德の中に念佛ありと云ふべきである、宿引きの前宿まで出懸け居る如くである、若し物體に約する時はその入り込んである念佛卽是二十願の行體である、釋尊說經の上も亦之に准知すべきである。

問云ふが如く十九願修諸功德は唯雜行にして正行なしと云はゞ、善導の所レ謂觀佛爲宗は正行觀ぢやから二十願の宗致にして十九願の宗致でないと云ふか。

答觀經の觀は正行觀であるから行體はこれ念佛の助伴、なぜなれば淨土門の本行は唯是念佛の一行なるが故に、餘はこれ念佛の助伴にして生因に擬すべきではない、獨り立ちすべき物柄でない、然るに觀經に於てはその念佛本行の幕下を離れて、正行觀が雜行觀の名代役を勤め觀佛爲宗の名を得て居る、してみればその行體は正行なれども、念佛の配下を離れて、却て念佛より上座に居して觀佛爲宗と名乘り出し生因に擬する所は、淨土の宗格を離れたる諸行往生の相た、故にその邊に約すればこの觀佛爲宗は乃ち十九願の宗致である、問安樂集に所レ謂萬行往生の中に觀佛爲宗等を攝せざるや否や、

答反難せん助念佛は且く措く、子が云ふ所の專修稱名は萬行往生の中に攝するや否や、若し攝すと云はゞ一向專修も亦萬行隨一の念佛と云ふか、若し攝せずと云はゞ樂集の判

目未盡理と云ふか、反難如斯今云く行體に於て正雜の差別あれど能修の機執は異がない、そこで執同の邊より自力の正行尙萬行中に攝するのである正行の體が直に萬行と云ふ義ではない。

問往生要集諸行往生の下、下三の念佛まで引くものは云何、

答下品の念佛其體諸行にあらざれども、觀經は諸行往生の說相を破らずして念佛を說く故、矢張り諸行往生の所屬となるのである、故に要集は經の說相に隨ふて下三の念佛まで諸行往生下に之を引く、吾祖三輩並に觀經の定散九品を十九願成就とし給ふもの這の指南に依りたるもの、問本典要門下に於て五正行を判じ、眞門下に於て、曾て助正を論じ給はず、してみれば彌陀助正の念佛要門諸行中にあるべし云何、

答それは觀經の說相に隨ふたもの、前來の所辯にて知るべきである、

問末燈鈔に「定散の善は諸行往生のことばにおさまるなり」とあれば、下三品散善の念佛も諸行中に入るに非ずや、

答それは前來所辯の如く、機執同の邊より、亦は經の說相より、亦は攝化の願意よりの給ひしものにて、正行念佛の體が諸行雜行中におさまると云ふことではない、

問校異三經往生文類には「無量壽觀經には定善散善三福九品の諸善、あるいは自力の稱名念佛をときて九品往生をすゝめたまへり、(中略)、これを雙樹林下往生とまふすなり」と、下三自力念佛も雙樹林下往生中にある非ずや、

答これ亦經の說相に隨ふたもの、故に雙樹林下往生を以て之を結するのである、況んや諸善の外に念佛を開て或は自力の稱名念佛を說くと云ふに於ては諸行中に彌陀念佛入らぬは明白である、

問口傳鈔に「修諸功德のなかの念佛をよところとして現しつへくは現せん」とあるは云何、

答彼は觀經下上品の說相より遡て十九の願意を顯はすもの、亦可し諸行を奪んが爲め且く與て修諸功德の中に攝したもの、この例甚だ多いことで、彌陀を諸佛中の王也と諸佛中に入れたは奪ふが爲めである、亦擇集に諸行之中選擇念佛とあるも、弘願念佛諸行の隨一ではなけれども、入れての給ふは奪んが爲めである如きである、

問二卷鈔に六種兼行を以て方便假門とするものは云何、

答これ亦能修の機に約するが故に假門に屬するのである、凡そ假門と云ふも眞門に對する時は唯十九願に限り、亦眞實に對する時は要眞の二門をつかねて一の假門とするのである。行卷の眞假對、眞佛土卷の由「不」知二眞假一等とはみな眞門を以て假門中に攝したもの、二卷鈔も之に准知すべきである、要眞弘の三門を以て配屬を論ずる時は念佛は眞にして假にあらずと云ふべきである、讃に衆善の假門ひらきてぞ名號の眞門ひらきてぞ等、これは假中に於て眞假を分つ判目、であるから概論は出來ぬ、

問善導疏釋六念中彌陀念佛あるものは萬行隨一に非ずや、

答六念中に彌陀念佛あるものは、是亦從假入眞の佛意に約するもの、六念の當面は彌陀念佛を攝すべき道理はない、

問擇集三輩章に念佛亦可「通二九品一」と云ふもの云何、

答三輩九品は開合の異であるから、所難の如きは傍正の正の念佛にして、その修相はこれ助正の念佛二十願の所屬である、されど其說相に約すれば十九願成就とすることを妨

げぬ事は前々來所辯の如くである、しかし九品と云へばいつでも十九願と偏執するものは大非也、高祖便往生に就て二往生を判じ給ふてあるから一概出來ぬ事は知られる。

問擇集付屬章に下三品の念佛を以て三福中の大乘に攝するは云何、

答雜行を三福に配する時はみな卽當の文字を下す、然るに下品の念佛を配する時は若準二上三福一者第三福大乘意也との給ひて、元祖の意下品念佛の下特に若準意の三字を下すものは三福の當位に非ず、若し强て論ずる時は且く行福の行に當る實は彼の所屬にあらざるの意を示すのである、嚴密に三福の行體を判せば雜行に局て正行には毫も通せぬもの、故に二卷鈔正雜甄別の所は就二雜散行一有二三福一等と正雜の分際を分列し給ふてある、

問擇集にしば〳〵定散諸行と云ひ、又定散諸善と云ふ、定散は正雜二行に涉る、それをおさへて定散諸行と云ふからは、諸行のことば何ぞ雜行に局らん、正雜に通ずべし、隨つて彌陀正行念佛も諸行の語中に入るべし、

答所難の如きは機執同に約するが故に束ねて諸行と云ふたもの、諸行卽雜行、雜行卽萬行、萬行卽諸行、萬行諸行は寬にして雜行は狹などゝ名に通局寬狹を云ふものは大に相

承に違す、高祖は既に判して於二雜之言攝二入萬行一との給ふてあるではないか、萬行隨一の念佛は、相承諸佛念佛をさしてある。

已上二大學說の主張點を擧示し了る、その中今は後說萬行隨一の彌陀念佛を立てざる說に伴ひたい、何となれば、名號は選擇行なるが故に、能修の機は種々あるも機に隨ふて法は轉せず、敎頓根漸の原則は動かぬものである。

至心發願欲生我國

至心發願欲生我國　上の發菩提心修諸功德等は、その行體は聖道門の佛果を期する行であるから、淨土の行でない、依てこの至心發願の願を發して此行を以て彌陀の淨土に往生を遂げたいと願ふがこの願の三心である、そこで諸行諸善が淨土の業因となる。

問十九願には諸行を誓ひ、二十願は自力念佛を誓ふ、その諸行を修するには必ず廻向を要するから、觀經九品にも、處々に廻向願求生極樂國と說いてある、たとひ諸行を修するも廻向せざる時は、則生因とならぬ、然れば十九願に廻向と誓ひ給ふべきに、願文には唯發願との給ひ、廻向の沙汰がない、又二十ノ願を說く小經には、處々に應當發願と說けるも廻向の言なし、又二十ノ願を見れば廻向とありて發願となし、本願と開說と齟齬に似たり云何、答先づ總して云へば則ち發願を擧れば廻向を具し、廻向を擧れば發願を具す、由りて兩願ともに發願廻向の二具はる、併し文の上に一つ〳〵にて出せるはこれ十九二十の願の趣きに約して其主なる處を出し給へたもの、先づ十九願では發願が主となる、和讃に「諸善萬行ことゞく至心發願せるゆへに、乃至、なかりけり」と、十九の諸行は元と往生の因でない、發願した計りにて往生淨土の因と成る、聖道より入り込み淨土の人となるには、先發願がさし當り必要である、故に十九願には發願と說いたもの、又二十の願は法頓の名號に手を掛く、その名號は不廻向の法體なるに、夫に廻向をかけたる失より、二十の願を成す、その旨を顯す故、二十には廻向と誓ふを其當然とするのである、實を云へば廻向の處に發願あり發願の處に廻向がある、且く持前に就て如斯二願を說き分けたものとは、明敎院淨信院等の說、石泉師はこの意を一層明確にして云く、發願と廻向とは兩願心相の異で、その意析攝の不同である、十九願の發願は攝受の意、攝受とは佛の衆生を化するに枉けて受込む方で、折伏は向をくじくこと、發願はなぜ攝受になるかと云ふに、久しく聖道門に留滯して其驗しなく、久しく生死に流轉したもの、

初めて淨土門に轉向する其轉向を賞美するので、轉派の僧が歸參すれば、芋掘りでも賞せらるゝ習ひ、發願と云は往生淨土を心掛る處をさす、他宗で云へば五時の中の阿含の如し、二乘の證果實は破すべきなれど、初めより破しては寄り附かぬ故、信解品には密遣二人と說いて、佛も憍陳如等と同じで、八十老比丘の相を現して、鹿苑に追掛けて五人へ應じて敎化す、六羅漢と云ふて、佛も維漢の仲間入をなされた、今の發願もそれの如くである。二十の願に廻向とあるは折伏の意で、廻向は心相の自力を標したもの、十八願不廻向より見しらかすのである、不廻向でなければならぬものを、仍り廻向するので、その自力の名前を標して懈怠を誡しむるのである。初め歸參した時は褒せらるれど、御末寺に成り畢ると、御冥加が少なひの、得度が濟ぬのと呵られる、他宗の方等の如く阿含で育でゝ證果を取らせた故、如何樣にしても謗罪を造て惡趣に沈む氣遣がない、そこで呵して焦種根敗などゝきめ付る、號聲振二三千一と、維摩經に云ふ風情である、一たび淨土門に入れば最早聖道門に歸る氣遣はない、一たび攝受したれども永くすて置ぬ、二十願になると彈呵抑貶して早く十八願に入らしむ、方等の彈呵は鹿苑の諸人をして恥

臨壽終時

小慕大せしめる、其故に般若になると轉敎付財が出來、追付け法華に開會す、二十願の果遂何の爲めぞ、十八へ入込ます果遂である、入込ます爲めに廻向と彈呵すと講說せり。

臨壽終時　時節を標して弘願の平生攝取に簡ぶ、安樂集卷上に大論の「一切衆生臨終之時刀風解レ形死苦來逼生二大怖畏一」の文、若人臨終時生二一念邪見一增上惡心卽能傾二三界之福一卽入二惡道一也」の文、「若刀風一至百苦湊レ身若習先不レ在懷念何可レ辨」の文を引いてある、和語燈卷一十一に云「衆生いのちをはる時にのぞみて、百苦きたりせめて、身心やすき事なく、惡緣ほかにひき、妄念うちにもよほして、境界自體當生の三種の愛心きをひをこる」と、顯名鈔に云「死苦といふは一期の報命ながくつきて當生の果報にうつる一刹那なり、水火風の三大おの〳〵散壞し壽燗識の三法みな捨離するとき百處支節きりさくがごとしと、群疑論に依るに、凡そ命終に三位あり、一に明了心、通して三性心に通す、二に自體愛心、唯有覆無記心、三に最後不明了心、唯異熟無記心とあり、この中で來迎見佛は卽ち明了心にあるのである。

假令　古來異說がある、一に云來迎は假益の故に假令と云ふと、一に云定散自力の衆

機に對して假りに迎接の靈儀を設け機に應じて權りに眞佛の上の化用を設くるから假令と云ふと、一に云假令を解して假設權假となすは妄である、假令の言は餘願に例するに若の字と同じ、若不生者の若は不定にして義は必生を示す、今亦然り必現の義である、假令之誓願有」由哉とは權假の義ではない、直に願文を取りて願名としたのであると、一に云不定の語である、さもありぬへくばといへるこゝろである、これは念佛と諸行との褒貶を顯はす言ばで、念佛往生の人は信行を得て十卽十生百卽百生決定往生なる故に、十八願には假令の語なし、諸行の機はことに依れば往生の行を退墮する、故にこの十九願に假令の言をおいて修諸功德の機は臨終に來迎もあることもあるべし、又來迎せざることもあるべしと顯はすこゝろで、諸行の機は一生不定であるから、其義を顯はして假令と云ふ、若し誓願の如くもあるそならば其人の前に現せんとなり、機の不定なるに依りて、來迎も亦不定なることを顯す故に假益であると、今云く願文の當分は假令とは不定の言を以て決定の義を顯はしたのであらう、若し直に不定の義を詮顯せば、諸行の機の欣慕願生心を害する、全體今願は聖道の行人淨土に轉向するの初門であるから、彼の

諸機を誘引するの佛意がある、して看れば文相直に來迎不定の義を詮顯するとは云ひにくい、しかし上願前に諸行を選捨し下胎化段に爲失大利と判じてあるより看れば、今諸行往生の願を立つるものは偏に隨他方便であるから、假令の言亦假門の益を顯はすの意のあることは無論であらふ。

不與大衆圍繞現其人前　與とは共也、兼也、並也、一義に訓して爲めとするは不可であらふ、大衆とは所與を擧げて能與の主佛を攝す、しかし特に能與を出さぬもの偶然ではない、亦以て來迎假令の義を顯はしたのであらふ、所與の大衆とは菩薩比丘の二種である、實積經と平等覺經と莊嚴經とには單に比丘と說き、大阿彌陀經には菩薩阿羅漢等と說き、今經と悲華經には總じて大衆と說いてある、九品異るに依りて來迎亦異る也。

現其人前とは、現に二種がある、一には來現、臨終に始めて來現して迎接するのである、二には顯現臨終始來に非ず、平生近緣の益の臨終果縛の穢體盡くるの時に顯現するを云ふのである、終南の所」謂勝緣勝境悉現前で、一多證文には釋して、「勝緣勝境といふは佛をもみたてまつりひかりをもみ異香をもかき善智識のすゝめにもあはんとおもへとな

り、悉現前といふはさま〴〵のめでたきこともまへにあらはれたまへとねがへとなり」とある、今願の現前は無論臨終始來である、諸行の機は固より自力の人であるから、平生佛力他力の加護がない、依りて臨終には過去今生の業障が一時に顯れ往生の障をなす、或は惡魔惡鬼の障りあり、或は死苦來逼して心が顚倒し往生を仕損ずるから、佛來迎して目前に現し屹度來迎の相を見せ給ふその相を拜んで佛の慈悲加祐に依り、心顚倒せず諸の障礙を離れて正念に住して往生する、してみれば諸行往生のものゝ臨終に正念ならしめんが爲めに來迎し給ふと云ふことを顯はすが現其人前の四字である、處で全體來迎は念佛の益が主か諸行の益が主か、若し前者なりと云はゞ、來迎は諸行往生の高祖の明判、末燈鈔執持鈔等に來迎は諸行往生にあり眞實信心の行人は攝取不捨のゆへに來迎たのむことなしの文、亦眞要鈔の念佛に來迎あるべしとみへたるはみな淺機を引んが爲めの一往の方便の說とある文などに相違する違敎の難がある、若し後者なりと云はゞ諸行念佛比較するに優劣天淵である、その劣の諸行にすら來迎あるのに勝の念佛に來迎なきとは理に於て不都合であると云ふ違理の難がある、之に就て學說が二派に別る、今代表

的に前者を代表する石泉師と後者を代表する專精院の二師の說を出すことゝした、石泉師の本典隨聞記には、先づ師說深諦院の說を出して云く「東嶽和上の說では來迎と云ふことは、三輩及小經の自力念佛等の上にさへあること、他力の念佛に有まひ樣はなし、勝劣で分つと、諸行は劣なり念佛は勝なり、なるほど三輩に諸行が說けてあるが、其諸行を說く三輩の中、上輩には此等衆生止現其人前とあり、中輩の文には其人臨終止現其人前とあり、上輩へ例說して具如眞佛と云ふ、これ下輩の來迎に簡ぶ意なり、下輩には此人臨終夢見彼佛とあり、又觀經の九品に總じて諸行を說き、慇ろに九品の上に來迎が說けてあり、又小經の自力念佛に、其人臨終止現在其前と三輩九品小經の自力念佛の上にさへ來迎あり、況んや無上殊勝の選擇本願の他力念佛の上、この來迎の益あるまい樣なし、故に高僧讃傳燈の宗師を歎ずる中に在て、鸞師章には六十有七ときいたり止一切道俗歸敬しきと云ひ、又吉水章には本師源空のおはりには止異香みきりに映芳す等とあり、みな臨終の祥瑞を、殊更に擧て讃嘆す、體の章に望ると、七祖の上出沒はあれど、この二章の意を以て例すれば、餘の五祖の上にもある意なり、開二眞宗念佛一導二濁世邪

僞一と、弘願も弘願なり、傳燈の祖たる宗祖の上此通りなれば、手近く此を以て知るべし、念佛の上に來迎なくて叶はぬ、諸行念佛兩方にある中で、有り體を以て云はゞ、全體が正く念佛の上にある勝益にて、諸行の來迎は念佛の餘德なり、道理如斯、更にその文證を出さば、口傳鈔に第十九の願文にも止現せんとなりとあり、これなれば諸行の上に來迎あると云ふことは、諸行の方に雜てある隨一の念佛が目的ではないか、又九品の中、下上品に化讃あり、その化佛は來迎佛なり、文に汝稱佛名故我來迎汝となり、口傳鈔の修諸功德の中の稱名をよところとしてとある、其根據とする處は、下上品の化讃と思はる、讃嘆する文を見るに、上中品には汝行大乘止迎汝とあり、上下品では發菩提心を來迎の由とす、汝今淸淨止迎汝とあり、又中中品は戒善を來迎の由とす、先一往九品の文を讀み下した處では、强ち口傳鈔の如く一概にも云はれぬが、本願非本願と別れた處より云ふと、右の如く諸行を讃嘆して、それを來迎の由とするは、これ隨機の說なり、口傳鈔にもある如く非本願たる諸行に來迎すべきことはなけれど曲げて機に隨ふなり、下上品の化讃は本願の念佛を讃す、これ隨自意正意の說法なり、其隨自意より立歸ると、

諸行を讃歎するは曲巧隨他の說なり、隨自意から奪てみれば下上品の化讃のみ立つ、故に擇集に此を取るなり、其處からして口傳鈔に修諸功德の中の念佛乃至をせんとなりとある、然れば諸行のみ勤めて念佛の缺た人は來迎なきなり、念佛缺ると缺ぬと、諸行の人の中に來迎の不同が出來るかと、片心に安からず思ふ人もあらんが、諸行往生と云ても讀誦ならば讀誦のみ勤めて外には何にもせず、念佛なども申さぬと云ふ樣な行者は無し、數多の勤めをし乍ら機機の不同で、其中で賴みにすると賴みにせぬとの不同あり、天臺の四種三昧の中に在てさへ、助道には彌陀稱名あり、諸經所讃多在二彌陀一と其所以を斷るなり、佛佛平等であれど、諸經多讃の故に助道に彌陀を用ゆと云へり、勿論觀經へ移りては諸行を勤め乍ら、ひし〳〵念佛せぬ人と云ふものは無し、ときに其念佛を賴みにするとせぬとあり、其上で簡で彼玄義分の九品を會せる內の通の釋も出來たなり、或は不殺爲正業又は戒行爲正業あり、其戒福の中に於ても具足戒を賴むあり、或は十戒八戒五戒と、いろ〳〵賴みにする行が異るなり、種々さま〴〵別れども右云意の如くにて戒善を賴むとて念佛せぬ者なし、不殺の人も亦爾り、他宗の四種三昧を勤る上の人さ

へ念佛はすれ、勿論往生淨土門と轉向發願の人に在て、心係る極樂の主佛の名號を稱念せぬ人餘り無し、行者の意に依て當てにはせねども其樣なことで九品の中念佛は下輩にあれども上六品へ通ず、擇集に具分爲八十一品とあり、行者の方には右の意にて當てにはせねども其樣なことで九品の中念佛は下輩にあれども上六品へ通ず、擇集に具分爲八十一品とあり、行者の方には右の意にて當てにはせねど、行者の方には兎あれ角あれ、佛の方には隨自の法故にそれで來迎のよところと取るなり、これなれば諸行の來迎通じて念佛の餘德とすること動き無し、云はるゝ處聞へるなり師說右の如し、ときに末燈鈔執持鈔手近き御文の上に來迎は諸行往生の上にあり、眞實信心の行者は攝取不捨の故に正定聚に住す等と云ふて、念佛行者の上になきことゝせり、今のまゝでは其處が折合はぬ、其にまた師匠の辨あり、末燈鈔執持鈔等に來迎は諸行往生にあり等と、あれで見れば何ほど道理の土は正き念佛の益で諸行の上には來迎と云ふことは畢竟念佛の餘德と云ても、諸行往生の上のみ云ことにて、念佛往生の方では云べきに非るやうに思はるゝ此は云何と云に、二鈔の文の中、來迎の諸行往生にありと云は所以あること、其故とは二

由あり、一には約二行者心期一、二には約二佛始來一、初は平生不定と思ふゆへ、あはれ佛の來迎を感ぜばやとそれを待ち受て、來迎あれば往生することゝ心得て居るから乞と來迎を期す、來迎を見ぬ內は心一定せぬ、それを諸行往にありと云ふ、念佛行者はそれと異りて來迎の儀則を俟たず、一念發起のとき往生治定の信が發起するなり、諸行往生の方は平生は不定の思にて來迎を期するなり、其邊で云ふ、後由は平生には來迎無し、臨終の時始て來迎す、これ諸行の勤めの行屆く處を見立てゝ、其の行者に應赴するから、來迎とは臨終の時始めてあり、其來迎なれば念佛の方にはなきものなり、平生にはあれども臨終始來は諸行に局る、此二由ともに來迎は念佛に無し、諸行に局る、其邊で來迎は諸行往生にありと云ふ、それと異れる來迎なれば念佛の上に固よりあること、正き念佛の益と云ふほどのことなる故、御文の上に念佛に來迎の沙汰のあること理宜」然也、然るに二鈔は眞實信心の行者の上で來迎を云はぬと云ふは此にも二由あり、一には約二行者不期一、二には平生に隱れてある者が顯現するのみにて諸行の如く臨終始來に非ず、顯現のみ故に來迎を云はぬ、右云如く臨終をまつことなく來迎たのむことなし、聖衆來臨の

儀相を見ずしても不定の思ひ決してなし、此不期の心に就て來迎を云はぬなり、これ行者の心相に就て設る一由なり、次の顯現の故にとは佛の應赴の邊で云なり、諸行へ應ずるには臨終始來なり、念佛往生なれば、一念發起の立ところに來應して常隨擁護なり、臨終は平生のが現るのみなり、此二由ありて念佛の方て來迎を云はぬなり、諸行に來迎を沙汰すると、念佛で云はぬと各二說あり、已上深諦院の說なり、叡曰此說力あり至りて精詳なり、就ては夫れに就て來迎の義體を心得ねばならぬ、此の來迎の義に眞假の二つあり、行者の三業を策修して、其行が行き屆て生涯ともに墜さぬ、それで生涯を盡して終に臨て其策修のおかげで、佛の迎接の義を感ず、策修往き屆て生涯過たずして感ずると云へば、平生には無き者なり、平生は來迎を感ずる加行なればなり、これ來迎と云ひ乍ら其假なる者なり、十九願に臨終現前と云も、二十願開說の小經に、其人臨命終時止現在其前と說く來迎も、十九二十兩願の所詮正く此に在り、皆假の來迎なり、生涯の內は策修加行の位で、其內には來迎無しと云はゞ、普觀所說の當來至此行人之處とはいかん、あれは平生にあるものなり、平生にありとすれば、今云ひ立た臨終始來と云ふ假

の義立ぬなり、いかんといふに、あの普觀の說は觀の時に就て說くなり、勿論觀門の說なり、行者自の往生の想をなす、其修觀中の所現の模樣が修多羅と合はねばならぬ、經には與十二部經合とあり、其修觀中に浮ぶ模樣が出定の後にも仍り心にも想はるゝので、經に出定之時憶持不失とあり、それで善導の釋にも、定散に通して忘れずに居るとして、定散無遺と云へり、その風情は彼日想觀に、黑白黃の三障盡きて日輪を見ると云が觀成なるが、其定中所見を閉目開目皆令明丁といふ、何つも心眼に浮ぶなり、閉目開目は形の異りにて、心眼に浮むは何つも同し、そこで皆令明丁と云ふ、又地觀の文に此想成時恒憶此事と云が、水想觀中瑠璃地を觀し、地下地上虛空の莊嚴を觀想することを云が、それを引き受て地想觀の初に此想成時と云ふ、未至修慧三昧發得之位と云へど、此想成時と云へば加行の滿位に至る、其處になると、地下の寶憧地上の寶樹寶池虛空の寶網等、形に閉目開目の異りあれど、成した心想はいつも浮ぶなり、唯除二睡時一のみなり、あの風情のことで、普觀の上自の往生想をなし、或は華開想が成就し、或は合想が成ずる等、定中の模樣なるが、その觀成すると、入定の時のみでなし、出定しても何つもその模樣

が心に浮ぶなり、其に就て其觀益を說て常來至此行人之所と云ふ、彌陀觀勢常に行人の處に在ると云も、今の觀境の處に就て來迎とはまた分齊異るなり、常來至此は修觀の上に在て云故、彼當分で常來と云へど、弘願から云ふと實の常に非ず、修觀にも退不退ありて、觀不退なれば、定力で常來と云はるれど、觀心を退するとそれ切りなり、常來至此行人之處は、佛の方から來るに非ず行者の觀力で來すなり、行者の業ざできたすなれば、常と云ふても常にならぬ、弘願は行者の業さは無し、一念發起の處攝取の益に逢ふ、攝取は佛の計らいなり、就行立信の文に念々不捨とあるが、あれも行者の策勵で攝取の御手が引けてはならぬゆへ、懈怠しはせぬと云不捨ではなし、攝取不捨の不捨で佛から捨ぬなり、そこで弘願の常は實の常なり、諸行の上は普觀の如く云へど、この弘願から云ふと觀力の退不退に依る故實の常でなし、あの通りの觀益あれど實は無きが如し、策修三業で來迎を感ずると云ふ、策修三業中で說た常來至此行人之所なれば今の處へ、普觀の文を持つても妨にはならぬ、眞假來迎中假の來迎右の如し、眞の來迎は弘願の上にあり、十八十九二十の三願の內、十九二十は假のな來迎り、眞實の來迎は十八願念佛往

生の上にあるなり、此に就て來迎の體あり、其業用あり、其成益あり、之を心得ねばならぬ、自體とは卽ち阿彌陀如來なり、二乘門に今既成佛卽是酬報之身と云たあの酬因之身が、今の阿彌陀佛で此が來迎の自體なり、十八願は其願事何にことぞと云に、十方衆生止不取正覺で、雜穢の衆生を眞實報土へ生れさす業さ用きが願事なり、動靜で分ると動なり、其動に報る者は酬因之身で、常途三祇の行に酬て成せる報身如來で佛の自證なり、其自證は靜なり、其靜は動から仕立るなり、それで卽寂卽照なり、靜かと思へば其自性靜寂の身が常に動き働く、これ本願成就の報身如來なり、それで如來正覺の擧體が衆生に向ふ、そこで正覺の自體まる〳〵往生法となる、第七觀に往立空中を辨する處に問答あり、此意で問答するなり、佛德尊高止輕擧と云たは如來の自證なり、不捨本願止端坐而赴機也と、自身動き出る筈無し、それでは事輕々しくなる、此は常途の自受用報身と云意で問なり、不レ捨二本願一來應二大悲一とは云ても問起の中では意を盡さぬ、其を答て此明如來別有二密意一等と云ふ、密意にいろ〳〵あり、止こは所詮常途に共せぬ處、尋常の佛身の義を以ては此こと曉められぬを云ふ、但以娑婆苦界止何由得レ勉と、本願に十

方衆生と擧た者は、雜惡同居止臨臨欲入の者、それに赴く用きが至心信樂欲生止不取正覺、其本願の成ぜられた報身如來で、佛德は尊高なれど、尊高の體では居らぬ、其まゝに輕擧して九界に臨む、立撮卽行不レ及二端坐以赴一機也と、常並の佛なれば一坐無移亦不レ動、何つまでも不動して端坐す、端坐は寂靜の德なるが、それが常に輕擧して立撮卽行いつも生死に臨で働くなり、此意を知らぬ故淨影が佛之眞身無二迎接相一と云ふ、如來の自證は奥の院に潛まりて衆生へ應對は無しとせり、なる程常の佛なれば十地の菩薩も見ることならぬ、皆他受用報身と云ふ御名代なり、其格から云へば迎接の相なし、然るに楷定古今の疏主の目から見ると、一向別途の報身を知らぬ論なり、第七觀に在て韋提の幽宮に臨むと云が如來の自證を其まゝ持出すなり、韋提卽是止凡夫位と、心想羸劣の韋提の幽宮へ照臨するは、輙然輕擧の振舞なるが、如來正覺の自體に持た德で餘佛の出來はぬ事なり、此阿彌陀如來が來迎の自體なり、二に業用とは大悲の招喚なり、今の通りの佛故其佛の口業より汝一心正念乃至水火之難の音聲が出る、決して常途の佛の言ふこと能ざる處、たゞ彌陀に局る、此が來迎の體が如右故あの通りの音聲が現るゝ、此音聲は大

音宣布と自餘の聲を止めて、十方佛國の諸佛へ此音聲響き亘りて、各國の諸佛其響きよりして皆發遣す、此娑婆で云と釋迦佛が仁者但決定止無二死難一と、言ば略なれども招喚と同じ、但決定止行は一心正念直念が響く、必無二死難一とは我能護レ汝衆不レ畏二水火之難一が響く、此娑婆界の如く十方亦同じ、十方引き統て云へば一々彌陀の招喚なり、此を大經には無量壽佛大音宣布一切世界化衆生等と說く、これ來迎の自體より現るゝ業用なり、そこで序題門には彌陀卽彼國來迎と云ふ、又斯る業用の成する益は如何と云に攝取不捨なり、光明の中へ衆生を入り込めて、不動大安と仕立る成益なり、定善義に三緣の釋あり、攝取不捨は總にて、三緣は其別相なり、其攝取不捨の模樣は增上緣の釋に諸邪業繫無能礙者とあり、あの言は增上緣中にのみあるが、義を以て論ずるに三緣同く攝取不捨の別相なり、故に三緣乍ら皆來迎の德用にて引き總へた處、攝取不捨中の別れなり、上に引た處の末燈鈔に眞實信人の行人は、攝取不捨の故に正定聚の位に住す等とあり、來迎は諸行往生にてあると云た諸行に對論して、眞實信心の行者の上で攝取不捨を因由として辨ず、右體用益と分つ中の成益にて辨ずるなり、如此阿彌陀佛と云ふ體性と、招

喚と云ふ業用と、攝取不捨と云ふ成益と、引統て唯一の來迎なり、此意を得て見ると來迎は他力なり、名は異れども其物柄は唯一なり、第二卷に攝取不捨故名阿彌陀他力とあり、これ成益を以て自體の上を釋するなり、是日ニ他力ニと結して此名を出す、其他力と云た者は卽來迎なり、弘願の上に來迎と云へば此通りなり」と辯ぜり、因に東嶽和上の傳を一言せば深諦院慧雲師は、西紀一七三〇一七八二廣島市專勝寺主、寶雲後に慧雲と改む、字は子潤、號は甘露、洞水、東嶽、藝轍の鼻祖、門下に大瀛(せいえん)(芳園)、僧叡(石泉)、雲幢、履善、大慶等の巨匠が出た、師が學問の動機は、一日城北白島の檀家に行かるゝ途中、楠木村渡船場にて一藩士と同船す、士「コリヤ〳〵小僧サン幾歳ニナラルヽゾ」と、師答へて十七歳ニナリマス」、士「手前ハ今何ヲ學ビ居ラルヽゾ、師大學ノ素讀ヲ」と、師「汝已ニ長ジテ猶ホ學ブ所大學ノ素讀トハ迂愚モ甚シ」と、公衆の面前で嘲笑されたが動機で發憤し、京都に上り、僧樸師門に入り、その他の大德を歷訪し、終に一宗の碩學となる、師に德行逸事多し、今一二を出せば、本堂頽廢、檀家より再建を申出た時、師その好意を謝し、徐ろに云はるゝには「願くは志を轉じて、大瀛を養成するの資とせよ、大

深諦院の略傳

瀛一人を育つるは、百寺を建立するよりも尙ほ勝れり」と、再建を許さなかつた、亦神棚、神符、秘咒、守札、現世祈禱を嚴禁したから、「神棚おろしの報專坊」と綽名された德川將軍家を背景とする增上寺より、淨土眞宗の宗名につき抗議が出た、師本如上人の命を奉じ、自著の宗名辨論を携へ、一碁客となりて增上寺に入り終日碁を圍み、歸るに臨み忘れ置きたる樣に粧ひ、宗名辨論を殘して立ち去る、後增上寺々主一讀三嘆、返駁に及ばず、宗名論平穩に終熄した。

專精院の來迎論

專精院利井師の決擇篇には、初に深諦院石泉師の義を略出して而して「評ニ云此義未だ來迎の義を詳にせず、元と來迎する所以は臨終の障碍を離れしめ、而も決定の想ひに住せしむる爲めなれば、弘願眞實門に於ては絕て必要なし、悲華經及び三經釋の如きは全く此の義なり、如」此の來迎を以て何そ念佛の益とせん、若し平生攝取の佛體顯現するを以て來迎といはゞ、名と義と相違す、本と來迎の名は終臨始來より立るか故に、何そ平生攝取の益臨終に顯現するものを來迎と名くへけん、委くは如」下、今解して云く、來迎は諸行の益、念佛は攝取の益、云何か來迎は諸行の益なるや、謂く十九願には來迎を誓ふて往因を決せしむるが故に、修諸功德至心發願の行心を以て往因を究竟せしむるは來迎の功によ

る何となれば悲華經云化卷本二引之「臨終之時我當下與二大衆一圍繞現中其人前上卽於二我前一得二心歡喜一以レ見レ我故離二諸障礙一卽便捨レ身來二生我界一」と、此經を以て正依を助顯するに愈明白なり、之に對し十八願は若不生者の誓を以て往生の正因を決定せしむ、二十願の行心も果遂の誓ひに依て生因を決着す、故に知ぬ來迎は諸行の益にして念佛の益にあらざることを、問來迎は臨終離繫の爲のみにあらず、既に鸞師の祥瑞終南の恒願一切臨終等も來迎にあらずや、答凡そ來迎の名目を用ゆるもの其例一にあらず、一には臨終始來十九諸行の益六要云々二に平生常來迎常來至此行人之所六要云々三には彌陀の招喚に名く、玄義分に彼方一より來迎す四に臨終顯現に名く鸞空等の祥瑞六要の前義五に還來待迎の義唯信文意四十二丁を同三十七丁に釋して不來迎の義を成す如レ此五種ありと云へども、臨終始來を以て當位とす、何となれば一には來は往に對す教に約す、迎は物來て之に接するか故に約字義二に義に依るときは多義あり、一には平生業成の故に、二に住正定聚の故に、三に攝取不捨の故に、四に機法一體の故に、五には平生親近の故に、六に報身不動の故に七には佛體卽行の故に、八に如來の行を行するが故に、九に心多歡喜の故に、十に名義相應の故に、如レ是の義あるが故に、機にも來迎を期せず佛も來迎を須ひざるに、鸞空等の祥瑞あるものは平生攝取の佛顯現するものにして來迎佛に非ず、問勝境の顯現することは許すや否

や、答平生攝取の佛及び信益の顯現することは無論なり、故に銘文には佛をもみたまつり異香をもかき等との給ふ、眞要鈔にもかねて證得しつる往生のことはりこゝに顯はれて、佛菩薩の相好をもおがみ淨土の莊嚴をもみるなりと云々、法德顯現することは廣大なり、是故に華臺音樂異香華蓋等の勝相みな信益の顯はるゝものにして來迎の儀則に非ず、問然らば恒願一切臨終時等その他來迎と名け給ふもの擧て數ふ可らず、況んや六要鈔には但以二顯現一是名二來迎一と決擇し給ふもの云何と、答攝取顯現を以て來迎と名くるものは引入淺機門の例にして、來迎を期する猶生の機に應じて來迎の名相を許すものなり、故に眞要鈔にたゞし念佛の益に來迎あるべきやうにみゑたる文證ひとすぢにこれなきにあらず、しかれども聖敎におひて方便の說あり眞實の說あり、一往の義あり再往の義あり、念佛において來迎あるべしとみゑたるはみな淺機を誘引せんがための一往方便の說なり、深義をあらはすときの再往眞實の義にあらずとこゝろうべしと云々、これは報身の實義に達せず來迎を執するものを淺機と云ふ、此機を引て知らず覺へず來迎を執せざる處に契はしむるに、念佛は諸行と異りて平生には近緣の益あり、臨終には來迎引

接し給ふと談ずるとき、諸行を捨てゝ念佛に入り、臨終を怖畏する意を除き、決信して臨終を愛樂するに到る、恒願一切臨終時とはこの相なり、これ誘引淺機の施設なり、問然らば三緣中の增上緣その他に來迎を談ずるものは淺機の自力念佛とするや、答然らず、來迎を談ずるは始來須來を云ふにあらず、平生近緣等の現するをみるはやはり弘願念佛なり、この念佛に顯現するの德義を來迎と名くるものは淺機を引くの意なり、所勸の念佛を假と云ふにあらず、彼の三緣釋の如きは親近二緣を平生の益とし、增上緣を臨終の益とす、その實は三緣皆攝取不捨にして臨平に通ずるなり、然るに臨平に三緣を分釋するものは互顯なることしるべし、故に增上緣已に平生の益となれば、恒願一切臨終時の益も亦平生となる、故に一多證文には此文を引て一念業成の證文とし給ふ、已に然らば三緣中の增上緣を以て來迎とするは猶生の機を引くの意味なり、問來迎は元と念佛の益なるべし、觀經には稱名故我來迎汝と說一是口傳鈔に修諸功德の中の念佛をよところとして現しつへくはそのひとのまへに現せんとなり二是、又和語燈三經釋攝取不捨と十九願の來迎と合して釋し以て念佛の益とす三是、是等の文何か釋せんや、答先に辨する如く淺機誘引の經釋を以て難すべからず、先づ觀經の如きは顯說に就かば機の堪不に依て不堪の諸行に來迎せず、得生の益をも與へず、堪能の念佛に來迎得生の益を說く、自力定散九品往生の相たなり、又隱彰に約せば化讃の正意廢立に在て諸行には得生も來迎をも與へず、稱名獨り來迎及び得生の益あることを顯す、然らば化佛の來迎とは稱名の處に攝取不捨の益を蒙りたるが顯現する處に付て來迎の名を付す、これ淺機引入の巧說なるべし一是、又口傳鈔は一義に云多念自力の臨終を期するは十九願の機にして、修諸功德中の稱名なりと、又可シ下上品の稱名念佛は諸行中なるが故に、彼經意を以て十九願の來迎を釋す、又可シ下上品の經意を以て來迎を念佛の益に奪はんが爲の故に修諸功德中との給ふ二是又三經釋は鎭徒の手より出れば正證を成せず、況んや吉水の本意より云へば十九の來迎を以て念佛の益とし、而も十八願の攝取不捨に混同して平生攝取の佛臨終に顯現するを以て來迎と名けて、而も十九願の來迎の本意念佛にありと願意の眞實一願言の意より取り給へるものなるべし三是、其他準解すべし、問元祖不來迎を談じ給へる處ありや、答和語燈一五、二、まめやかに往生のこゝろざしありて彌陀の本願を信じて念佛申さん人、臨終のわ

ろきことは何事にかすべきぞ、其故は佛の來迎し給ふは行者の臨終正念の爲めなり、それを心得ぬ人は皆我臨終正念にして念佛申したらんには佛は迎ふべきぞとのみ心得たるは、佛の本願を信ぜず經を心得ぬなり、又同七四五同五四八漢語燈七五又四種往生は黑谷聖人の料簡なり、無記狂亂の如き、觀經及び鼓音聲經に依りて義を成し給ふ、その他數ふ可らず、問今家の不來迎を談ずるには終吉等の上に沙汰する來迎を簡去するや否や、若し簡去するとせんか顯現來迎は云何か釋するや、答簡去不簡去の二途あるべし、云何が簡去す、謂く來迎は猶生の機に應ずるの施設なるが故に、云何か簡去せざるや謂く顯現の相を取るが故に、問然らば來迎の名は引入の爲めなれば、その實際をいへば無來迎と稱して可なりや、答無來迎といへば語急なり、寛なる不來迎の名を以て顯現をも遮するの誤りを恐慮するものなり、問六要鈔の二義云何か解するや、答前義は常隨影護の故に、名體不二の故に、臨終來迎なし、故に不來迎と云ふ、然れども臨終に影向の相顯現するを顯現來迎と云ふ、外より來らず、始めて來らず、故に不來と云ふ又顯現に就て來迎と云ふ、この中釋文顯說常途談耳とは觀經の顯說を云ふに非ず、釋文顯相一念隱顯釋の如し、常途と

は通途聖道を指すに非ず、來迎の沙汰ある當面といふこゝろなるべし、然るに或は此義は顯現來迎を許すの義とす、玄義の彌陀卽彼國より來迎すとの給ふに同じと、或可ㇾ淺機引入に約するものとす、故に眞要鈔には來迎を執する者に對して當流に來ると云ふはみな方便なりとの給ふなり、今は後義に依る、又六要の第二義の意は、來は化身の來現、所ㇾ應ニ迷情一ニ方便是非ニ實義一、不來は報身、一座無移亦不動の故に、此義を解するに、一說には來と不來と且つ化身と報身とに分くれども、若約ニ所達至理之機一不ㇾ可ニ必來一々而不來、々々而來等と、眞報身は不來に局る可からず、不來卽來々卽不來無礙なり、故に來應大悲彼國來迎の當體西岸上有人喚曰等と、故に偏見に拘はるなしと云ふ、一說に云來は化身にして應ニ迷情一に局る、若し至理の機よりいへば不來なり、然れども佛は從ㇾ眞起ㇾ化、また化則眞なれば化用の故に往あり還あり來あり迎あり、その體眞なるが故に不來不去、これを來而不來不來而來と云ふなり、故に眞化更に違ふ處なし、偏見する莫れと釋し給ふ如ㇾ此解するものは次に群疑論を引て具さに眞報不來化身來去の義を示し給ふ、又前にも涅槃經を引て實には不往不來善根力諸行の機をさす、見ニ如ㇾ此事一已上准ㇾ之云々す、眞要鈔

に照して見るべし、此二義の中前説は群疑論を一往の釋と會するこゝろ、後説は全く涅槃群疑に合してみるのこゝろ、今は後説に隨ふ、問若し後説によらば眞報身は必ず不來に局るものとするや、答來不來不動而至々而不動、無礙自在なるものが眞報身なれども今眞報身を不動とし、化身來迎を而至として、據勝門に依りて差別するのみ、問二十願に來迎を誓はざるもの云何、答一義機失同の故に十九の來迎卽二十の來迎なれば別誓に及ばず、一義に云名體不二の名號敎頓の故に來迎を誓はず、一義に云機は同く來迎を期すれども、行法に於ては親疎あり、疎なる諸行すら來迎す、親なる念佛をや、此等の義あるが故に更に二十願に來迎を誓はざるものなり」と辨ぜり、以上二師の説何れも御尤の説で洵に精緻と云ふべきである、愚案には終吉の法義に強くすはれば石泉師の説の如くなるであらう、高祖義に強くすはれば利井師の説の如くなるであらふ、着眼點の相違より兩説となりたのではなからふかと思はれる、今云く吉水の來迎を旺かんに念佛の益とせられたのは、これは無論報佛の來迎に約したもの、亦來迎の當義に約したもの、高祖の來迎を諸行の益となすは、化佛の來迎に約し、亦十九願の當相に約したもの、しかし吉水にも諸行來迎の説ないでもない事は、漢語燈七五和語燈七八等の如く、高祖も念佛の來迎を語らぬでない事は眞要鈔末の四五如くである、しかし兩祖各各其一邊を主として、吉水は盛んに念佛に來迎の益を談じ、吾祖は專ら來迎を諸行往生と決して、弘願不來迎の義を唱へ給ふたは理由のあることである、則ち吉水は吾朝淨土門初開の元祖なれば、終南の化風を承けて、觀經の説意に依りて二行廢立を詳にし外に向つて聖道の機を誘引せんことを務められた、そこで諸行の益も奪ふて念佛に屬せねば彼を廢し此を立するに便でない、故に三輩章化讃章等、旺かんに念佛の勝益としてある、一願建立、願海に眞假をみぬ立方である、和語燈一に十九願の來迎を十八願念佛の益として、念佛衆生攝取不捨に合釋してある如き、終南の一一願言の釋意にして、四十八願一念佛往生と顯すので、吾祖の願海に眞假を分別し給ふとは、大體法門の建立に於て相違がある、又高祖は吉水開宗後なれば、內に向つて眞假の水際を明かにすることに努め給ひて、直に大經に居して願海に眞假を分別し、十九願所誓の生佛須來に就て、來迎を諸行往生と決し、十八願若不生者の唯往生を誓ふに依りて、弘願不來迎の義を立て給ふのである、不來迎と

は、或は不期來迎に約し、或は常來迎に約し、或は近緣顯現に約し或は報身不動に約して解するも、一括せば不須來の來と云ふ一語に約まるであらふ、問十九願に來迎を誓ふ所由云何、答一には非本願諸行の過失を示さんが爲めの故、當前では來られぬものぢやから迎ひに行くと云ふので、諸行非本願と云ふことが知られる、問ソーとは何を以て知る、答假令の二字あるが故に假令の假は眞に對する假なり、縱令と不同、故に高祖は假令之誓願有由哉との給ふ、二には聖道の機を誘引せんが爲めの故、諸行を此土にて行し得證せむとせば障礙魔障多し不如彌陀に歸せよ、臨終來迎無礙の淨土に入らしめ行成就せしめんと諸行の機を誘引するのである、第一由は十八十九相對立義、第二由は十九願當分に就て立義したものである。

第二十願鎭西義

第二十願　鎭西義

上の第十八第十九の兩願は順次往生の願である、今は順後生の機を攝する願である、法藏菩薩結緣の衆生久久に流轉するを愍念し給ひて、此願を選擇して順後の機を攝するのである、故に此願を三生果遂願と名ける願文中聞名係念と云ふけれども、其善劣弱にして順次の往生出來ず、宿善となりて三生等に速に往生の係念を果遂せしむる願意である、願文に植と云ひ、果遂と云ふは順次でない、順後を顯はすの語である、下に大綱鈔の義を出す看るべし、元祖は漢語燈第二一五に繫念定生願と名け、記主は東宗要二三〇に遠生果遂願と名けてある、さて係念とは此に二機がある、一には唯願無行、これ未具三心ただこれ欲生係念の分にして少分欣求の心である、二には願行具足すと雖、始實終虛等の人之を安心の退者と云ふ、如是等の人順次に生ずる事は出來ぬ、法藏菩薩此等の機を愍念してこの願を建て、永劫を三生に促めて速に往生の係念を果遂せしむるのである。

願名と願由

聞我名號係念我國　聞名は所求で去行ではない、係念我國は、極樂は最勝國と聞て其國を係念す、係念は欲生心である。

植諸德本

植諸德本　德本は念佛及餘行である、植とは宿善の義を顯はす、今願の意は宿善の强弱を强て論せず、たゞ淨土を聞て賴みを彌陀に係る最初の係念を保護して果遂せしめんとの願意で、植諸德本は果遂の機の本善を顯す語で、これは果遂の所由にして所誓の行

ではない、植と云ひ、德本と云ひ、以て三生順後の義を顯したもの、其見込として六由を立つ、一に異譯の兩經幷に三生と說く故に、二に御廟順後業の釋助證たるが故に、三に植諸德本の言は多生に約するが故に、四に不果遂者の言順後生を顯はすが故に、五に觀念法門に植諸德本の一句を除くが故に、六に結緣の人を捨てざるが故にと云ふ、了惠の撰擇大綱鈔中(淨土宗全書第八回二九頁)に云「十八と二十と同く生因ならば、念佛と諸行と異なりと雖、說相亦一準なるべし、而も其文相全く十八に異なれり、知ぬ生因に非ざることを、其異有レ三、一ニ植德ノ異、二ニ德本ノ異、三ニ果遂ノ異なり、一ニ植德ノ異とは、今經の始終に順次の因を說くには、或は十念と云ひ、第十八願或は修諸功德と云ひ、第十九願或は修諸功德修行功德と云ひ、上輩文、或は大修功德と云ひ、中輩文或は作諸功德と云ふ下輩文、然るに今の願文には植德と說く故別異となす也、又順後を說くには、或は植衆德本と云ひ、菩薩嘆德文或は積植菩薩無量德行と云ひ法藏比丘長時無餘修、或は皆坐前世不植德本と云ひ、貧窮乞人或は汝等是於廣植德本と云ふ淨穢二土修善比校、これみな順後なり、今願の植德何ぞ獨り順次ならんや、二ニ德本ノ異とは、上に出す處の文みな悉く順後を德本と名くる等是也、加之ならず、或

は積累德本と云ひ補處願文、或は現其德本と云ひ、供具如意願或は具諸德本受決當作拂と云ひ極樂菩薩授記の文、或は若人無善本と云ひ、值教宿善或は修習善本と云ひ、彼土菩薩德行或は積累善本と云ひ勸獨勒令利他或は不修善本と云ひ五燒五惡文、或は猶信罪修習善本欲生其國と云ひ、胎生因或は五百歲中不得供養修諸善本と云ふ邊地過失、此等の文を看るに、或は結緣に約し、或は佛果に望め、或は化生に望め胎生因、各善本及德本とす、未だ直因を德本と名くる文を見ず、今の願既に德本と云ふ、何んぞ順次の直因と云はんや、單の植、單の德、猶ほ順次に非ず、何に況んや並べて植諸德本と云ふおや、加之ならず、第十八願成就に云乃至一念卽往生唯除逆謗と、第十九願成就に云其上輩者發菩提心修諸功德菩終壽時無量壽佛與諸大衆現其人前と、中亦爾り、第二十ノ願成就に云若人無善本不得聞此經淸淨有戒者乃獲聞正法宿世見諸佛樂聽如是敎と、若し宿世見佛等の文第二十願成就に非ずと云はゞこれ何れの願成就するや、知るべし此文二十願成就なることを、然れば則ち願成就の文を以て二十願を驗す、定めてこれ宿善果遂の本願なる事を、又大師云く過去已曾修ニ習此法一今得ニ重聞一卽生ニ歡喜一正念修行必得生也と、これ亦二十願成就の意に應ず、三ニ果遂異とは、昔の善本に對し順

後に往生するを名けて果遂とす、全く若不生者の義に異れり、若し此願益順次の生ならば何そ忽に語を改めて果遂と云ふや、十九二十俱に諸行を標す、只來迎と果遂とを以て兩願の意を顯はす也」と云ふ。

不果遂者　この願文に過現門と、現未門との二門分別がある、過現門の時は、聞我等の三句は過去を明し至心等の二句は現在を明す、不果遂者の一句は未來を明す、大阿彌陀經卽ち此門に約す、次に現未門の時は聞我等の三句は現在を明し、至心等の下は未來を明す、この未來の中に於て初二句は第二生である、心行具足するを廻向と云ふが故に、次の不果遂者の一句は第三生である、これ正しく往生の生である、今經は卽ち此門に約す、この二門の名目は山王院法華論ノ記を借る、已上義山の大經隨聞講錄に據る。

第二十願　西山義

要釋鈔に云く「聞我名號、係念我國、植諸德本ト者、念佛、來迎、定散也、至心廻向欲生我國不果遂者ハ、三心也、此ノ願ハ結スル上ノ三願ヲ也、十七ハ定散、十八ハ念佛、十九ハ來迎也、三心ハ有ニ十八願ニ是レ就ク念佛ニ、十九ノ願ニ有レ二、是ノ諸善ト與ニト來迎ニ也、然ルニ今ノ願ハ結ス上ノ三願ヲ故ニ、定散念佛來迎三心ヲ說クニ此願ニ也。

聞我名號と名號とあるから念佛と云ひ、係念我國と彌陀の淨土へ往生せんと念を係るから來迎を得るのである、亦植諸德本と過去に於て德本衆善を植ゑしが故に定散と云ふ、至心廻向等とは無論三心である、ケ樣にこの願で上の三願を結するのである故、この願に定散念佛來迎三心があるのである。

其故ハ上ノ三願ハ別別ニ說ニ定散念佛來迎ニ者、平生ノ安心也、然ル間皆別別ニシテ而無キカ其利生ニ故ニ、云ニ十七ヲ咨嗟ト是レ悲傷也、十八ニハ云フ十念ト是レ無レ願、十九ニハ云ニ假令ニ是レ未タ眞實ニ也。

三願ニに別別に定念來を說くは、平生ノ安心とは、平生は時間が長期である、當得の臨終急迫時短に對して云ふ、「咨嗟悲傷」とは、定散は今世の益なり、今世は智慧なり、名なり、空に歸す、他力の慈悲より見れば、悲痛悲傷なりの意で、玄義別時意の「傷ニ今世ノ錯」の意と同なり、「無願」とは、十八願の十念は行であるから無願と云ふ、「未眞實」とは、十九願は未眞實であるから假令と云ふ、三願の眞實成就は二

十ノ願との意であらふ。

然ルニ今ノ願ニ結シ上ノ三願ヲ而爲ニス一願ト者造ニ臨終ニ也、臨終ニ定散念佛來迎三心皆一ニ合シ而只可レキ遂ニ往生ニ也、故ニ上ノ三願ハ卽便往生ナリ、此ノ一願ハ亦當得往生也。

文解し易し。

聞我名號ト者念佛也、上ノ十八ハ念佛ナル故ニ云ニ名號ト、就キテハ機ニ云ニ名號ト、付ケハ佛ニ誓ニ名字ト也。

名號と云へば、名に限り、名字と云へば體に就く、玄義觀門義一（西全四頁）に云く「觀門より弘願に歸するの名字立ちぬ」と、同二（西全三九頁）に「今此の釋名の意、無量壽の名字より、依正二報通別眞假等の相を聞きて、是を釋す、これ則ち彌陀弘願の名字より、釋迦觀門欣慕の法を說き玉へば、この觀門還りて弘願に歸すべし」と、要釋鈔第三十四願に「名號と云ふ時は、南無阿彌陀佛とす、聞我名字と云ふの時は來迎たるなり、臨終の來迎は平生に於て名を以て之を敎ゆる也」とある、字と云へば體に近き名詞であるから、付レ佛誓ニ名字ト也。

係念我國ト者來迎、念佛ヲ納ニ來迎ニ也。

係念と云へば念佛のこと、それを來迎に收めて、係念我國を來迎と云ふ、名を體に收めたもの。

植諸德本ト者、定散之機也、植ノ字者指ニ過去ヲ也、定散ノ機ハ過去ノ業ヲモテ感スルニ今生ノ果報ニ也、無ニ過去ノ修因ニ者今生ニ不レ可ニ此ノ果。

上六の善機、下三の惡機、みなこれ過去に積植せる本所修の果報である。

念佛者現在也、願心ハ今生ニ無レ願故ニ必遂ニ後生往生ニ也。

「今生ニ無願」の願は、一本退に作るを好しとす、又現行本の如く願とすれば、念佛は現在なれば、日來の願心無し、當得往生なる故、機の願心無し、秘決四〇六紙の意。

來迎者未來也、捨ニ本願ニ、捨テ、大悲ヲ自ラ來ル故ニ不レ依テ過去現在ニ也、分ニ別スルハ三世ヲ本爲レ此レカ也、應レ知、今在ニ念佛來迎定散ノ事者、爲レ令下メンカ此ノ定散ノ機ニ具中足セ次下ノ三心上ヲ也。

本願は三心なり、大悲は稱名なり、三惡ノ火坑の機の前に彌陀獨り來迎するは未來也、來の一字は未來を意味する、秘決四〇八頁參照。

至心ト者至誠心ナリ、回向ト者深心ナリ、願心ヲ納ムルニ行者機ノ得生今成スルカ故也、欲生我國ト者廻向

發願ノ來迎也。

願心ヲ納レム行ニ者機ノ得生今成スルカ故也とは、回向とは行なり、其を深心に配當したるは、願心に行を收めたる貞、又定散の機に三心を具足せしむとあれば、是れ衆生の願心(定散ノ機)に阿彌陀佛者卽是其行の行を收めて機(定散)の得生を成せしとする、至心の願心に阿彌陀佛の行を收めて、機の得生を成るのである。

不果遂者ハ、結シ上ノ定散念佛來迎ノ三心ヲ、而説テ心生歡喜歎未曾有廓然大悟得無生忍ト是也。

文解し易し。

問曰ク於テ定散之機ニ既ニ言レ植ト者、無ケンニ過去ノ修因ト者可キカ難カルニ往生シ乎、答ヘテ云ク往生者依リニ本願ニ、願心ハ依ニ宿善ニ也、問云ク願心者三心也、雖レ發ストニ三心ヲ可キヲ有ニルニ不得生ノ之機ニ乎、答ヘテ云ク發サ三心ヲ可ニ往生ス、但シ雖ニ無宿善之機ナリト、可シレ有ニル發ニスル「三心」、爲ニ十方衆生ノ成ニスルカ正覺ヲ故ニ、一人モ漏ルヽモノアラハ往生ニ者爲ニ其機ノ本願ニ可シレ空シカル、若シ不ニル往生ニ者佛願ノ爲レ失。故、三心ノ發ト不發ト當機ニ具スル不定ニ也。

文解し易し、三心ノ發不發當機ニ具スル不定ニ也とは、三心の發不發直面の當機には、宿善の有無不定である、縱令宿善なくとも、三心發起の當機もあるべしとの意。

此ノ願ニ有ニ寶樹觀之意ニ、臨終ニ往生決定シテ果ニ遂スルヲ之ニ爲レ果也。

極樂の寶樹は、七重具足するも、果を主體とす、定來念等の區別あるも、來迎の成就果遂を主とす、恰も樹の果を體とするが如きである。

明秀師の四十八願鈔に云く「此ノ願ハ上ノ三願ヲ都合ノ一種ニ果遂シタル也、謂ク聞我名號ト者第十七願ノ意也、係念我國ト者第十八願ノ意也、植諸德本至心廻向欲生我國ト者、第十九願意也、不果遂者正キ當願體也、但シ上ノ三願來テ此願ニ始テ一種ニ非ニ果遂シタルニ、其ノ當願ニ名三願一種果遂シタルヲ此願ニテ顯シタル也。

不果遂者が二十願の願體である、四十八願何れにも不果遂者不取正覺の語あるべきを、今生因願の下にて之を誓ひたるものであるから、近くは上の十七十八十九三願の果遂、廣くは四十八願の果遂、三部經の果遂、一代經の果遂と云ふべきである、但しこの果遂とは因願を成就するを果遂と云ふたものとすると、鎭西聖冏師の二藏頌義所難のそれでは四十七の本願と云はねばならぬと云ふ評難が的中する樣に思は

れる、であるからこの果遂とは成就、成就とは得益、得益とは卽得往生極樂國、派祖不果遂者の釋下の得無生忍でありて、要するに彼土得生が彌陀本願の最終の目的、之れに達成したを成就と云ふたもの、換言せばこの二十願は彼土得證の最終目的を誓はれたものと解すべきであらふ。行觀師の選擇集私記(淨全卷八の三七三頁)に(與諸大衆現其人前と說くは、十九の聖衆來迎を說くなり、於七寶華中自然化生と說くは、二十果遂の願成就を說くと見へたり」等とあるにても其內意推知せらる、但し西山家傳統の說はやゝこれと異なりて居るやに看受けらるゝも、亦鄙說に共鳴せられて居る西山の學者も居らるゝのである、兎も角も鎭西聖冏師の二藏頌義に出せる長文の西山評破文と對照攷究すべき問題である。

問三願一種ニ果遂スト云其意云何、答果遂者成就也、成就者得益也、自レ本今ノ別願ハ不レ待ニ敎行ノ次位ヲ不論ニ機根ノ堪不ヲ、唯聞ニ證誠ノ佛語ヲ、卽名體俱時ニ顯テ速ニ成ニ無生ノ益ヲ也。

文解し易し。

故ニ經云聞說阿彌陀佛十七願、執持名號若一日若二日乃至七日一心不亂十八願、其人臨命終時阿彌陀佛與諸聖衆現在其前、乃至、卽得往生極樂國土十九願、已上、是正ク覺他大悲ノ果遂也、然ルニ雖ニ四十八願廣多シト一、唯是レ生因欣慕ノ二也、其ノ生因欣慕ハ極ルニ往生ノ一益ニ也、故ニ此ノ三願成就スリヨクシテ餘願自然ニ成也、爾者此ノ願雖レ云ニ三願ノ果遂ト一、意四十八願ノ果遂也。

文に極ル往生ノ一益ニ也とあるが、果遂であり、成就である。

又此ノ本願名號處ニテ、聖道淨土ノ佛法ハ、兩實兩益ト成シ顯タル故ニ、有ニ三部經、幷ニ一代敎ノ果遂ニテモ一、故ニ眞身觀ノ釋ニハ擧テ淨土ノ三部經一、其下ニ云ニ此例非レ一廣顯ニ念佛三昧竟ト一。

佛佛みな總別二願がある、彌陀は總願の上に超世の別願を發し、本願名號を成就す、諸佛に總別二願あるも、別願をも總願に攝めて、諸佛は總願を主とする、諸佛は自覺の極、彌陀は覺他の極、聖道は自覺の法、淨土は覺他の法、聖道は成佛、淨土は往生、聖道は智慧、淨土は慈悲、西谷は聖淨兩實と術語し、深草は聖淨一道と術語す、聖淨二門は畢竟佛の二德であるから、一代佛敎、慈悲よりすれば淨土敎、故に三願の果遂が、四十八願の果遂でもあり、三部經の果遂でもあり、一代佛敎の果遂でもある、聖淨兩實なるも、衆生趣入の上に一を捨て、一を取るを廢立と云ふので

ある、明秀師の鈔物等に、聖淨配立、聖淨廢立、聖淨兩實等の用語注意すべきである、今一二文を出せば、明秀名目卷中の六紙に「この序題門に於て、聖道淨土の佛法の至極を擧て已下六門の大意を顯はすなり、謂く五乘十聖も測らざる眞如法性の妙理を明して、聖道敎の至極とし、三賢十聖も闕はざる發遣迎來の密意を明して、淨土敎の至極とす、然れば則ち一家の配立に聖道淨土兩實と談ずるも、亦此門に依る也」と、其他疏幷に選擇集私記等に聖淨兩實、聖淨配立、聖淨廢立の語所々に散見する。

四十八願三重の意

夫四十八願ノ願願ニ有二三重ノ意一、謂ル因位選擇ト、諸佛能讃ト、衆生證得ト也。

これより四十八願を、廢立、傍正、助正で解す。

一ニ因位選擇者、立二四十八願一ヲ當位ハ、未三阿彌陀佛ト成二正覺一ヲ、未レ被二諸佛一ニモ讃嘆セ、未レ至二南無阿彌陀佛一ニモ、此位ニ亦有二二意一、一ハ諸佛彌陀俱ニ同二諸佛一ニ、有下施二總別二願ノ利益一之位上、是ヲ爲二三身門ノ自覺ノ功德、釋二一切諸佛各有二總別二種之願一此ノ位也、二ニハ諸佛彌陀俱ニ同ク來テ二障重ノ凡位一ニ、有下成スル二選擇本願念佛一之位上、是ハ彼ノ總別二願ノ上ノ超世本願之大悲也、此ノ位ノ念佛カ正ヲ離二機情一ヲ離タル二定散一ヲ、諸佛同體ノ大悲之專念阿彌陀佛ニテ有レ之、此ノ所ヲ釋下言念佛者卽專念阿彌陀佛、口業功德、身業功德、意業功德、一切諸佛亦如レ是上、是ハ因位本願ノ廢立重ノ果遂也。

三身門の諸佛には、總別二種の願ありて、四弘の誓願を起し、六度の修行を修し給ふ、之は自覺修性の功德、諸佛同道の利益である、亦諸佛に他力往生の願意がある、之は覺他大悲の密法である、さて阿彌陀佛は十劫正覺の昔し、一切諸佛の別意を選擇して、四十八願を立て、其上に兆載永劫の問、六度萬行を修して、總別二願を俱に別願に極めて、四十八願一一願言稱我名號卽是酬因之身の正覺を成し給ふ、かく彌陀如來諸佛の別意を選取して、先づ稱我名號と正覺を成し給ふ方よりは、諸佛に對し、彌陀一佛の超世の本願と云ふのである、又この六字の名號が、諸佛內證の密意なる方よりは、三身門の佛敎に對して、諸佛同心の超世の本願と云ふのである、この選擇本願の念佛は、離敎離機非定非散の諸佛同體大悲の專念阿彌陀佛であるから、之を言念佛者卽專念阿彌陀佛口業功德、身業功德、意業功德、一切諸佛如是と

釋するのである、かく諸佛に對して超世の本願と云ふから廢立重と云ふのである、行觀の玄義分私記卷二五に云く、諸佛は總願の方に酬いたる佛、彌陀は別願の方に酬たる佛體、但し彌陀も總別二願を果たして、自の正覺を成し給へとも、別願が本意たる故に、別願の方にて正覺を成し、四十八願稱我名號酬因之身と云へり、諸佛も總別二願を果し給へども、總願面を體と成する故に、萬行圓備の佛と云ふ、故に彌陀も總別二願を自正覺の內證に持ち給へども、總願の方を諸佛の方へ押し遣りて諸佛の體とし、諸佛も總別二願の功德を成し給へども、別願他力をば、彌陀の方へ押し遣りて、彌陀選擇の本願と爲すなりと云ふてある。

二諸佛能讃ト者、恒沙ノ如來酬テ咨嗟ノ本願ニ、證讃ノ四十八願感成ノ國土ノ莊嚴使ニ人ヲ欣慕一、卽四十八願ヲ爲ニ所讃ト一、定散二善ヲ爲ノ能讃ニ、而能所一體ニ見說一同ニ證ニ誠ノ之ニ、遂ニ尅ニ成ス通別五門定散ト一、是ヲ釋ニ彌陀本誓願極樂之要門定散等廻向速證無生身ト一、是ハ果成ノ能讃傍正重ノ果遂也。

恒沙の諸佛咨嗟の本願に酬ひて、四十八願所成の極樂の依正を稱讃する、咨嗟定散の佛語は、能讃でありて、四十八願は所讃である、所讃を離れて能讃なく、能讃を離れて所讃はないから、能所一體とも、佛體佛語の定散とも云ふのである、佛體から云へば見を成し、佛語より云へば聞を成す、見說一同の故に、觀經序分の見彼國土も、聞佛正說の位の見で、見說一同である、七觀の得忍も、說是語に依りて空中尊を見る故、是亦聞に依り見を成する見說一同である、全體觀經序分に於て、韋提の爲我廣說無憂惱處の請に對し、放眉間光す、已說の定散は、日觀已下の十六觀なり、未說の定散は欣淨五文に出在する、放眉間光を放れて定散なし、爲我廣說の請に對して、佛は光臺現土す、說現相違するもの、如來意密を顯はすのである、意密とは咨嗟稱の願に酬へて、韋提の請のまゝに說き給ひては隨情の法となるから、今說現相違して以て他力を顯はしたものである、鈔文に通別五門定散とは、通別五門卽定散の通別一體である、通別一體とは、通を別に一體にするなり、則ち通の諸佛達が自力解行の方をば、一向に拋て、この彌陀の本願他力の方を能讃し證誠するのである、これを同心同讃と云ふて通別一體と云ふ法門である、此時は萬行萬善は念

佛の一行に極り、一切の諸佛彌陀一佛に極り、十方淨土は別所求の極樂の一土に極る、今この通別五門異方便の定散である、通別一體の故に傍正重と云ふ、五門とは、一に通所求、十方淨土これ無盡の佛國である、二に通去行、十方通生の行、これ定善の行である、三に通答、佛頂所現の十方淨土、亦これ無盡の佛國である、四に別所求、極樂世界、五に別去行、思惟正受の定善行である、さて引證の彌陀本誓願極樂之要門定散等廻向速證無生身とは、傍正重で訓點せば、彌陀本誓願の極樂の要門と讀む、十七願をさして彌陀本誓願と云ふ、廻向とは日比の自力根性の心を轉じて、他力に廻心するを廻向と云ふ、觀經異方便佛語の定散は、定善も廻心の爲め散善も廻心の爲め說くと意得れば、定散等きなり。

三ニ衆生證得者、前ニ所レ云二重ノ法門ハ、皆是成スレ覺他窮滿一、衆生得益ノ內證也、但內證ニノ而非ニ內證一卽心外也、心外ニノ亦非ニ心外一卽內證也、約ニ所觀之境一時ハ境智一體ノ心外也、約スルニ能觀ノ智一時ハ境智一體ノ內證也、卽爲ニ玄義依文ノ替一、但雖レ有ニ此ノ替一唯是レ決定ノ信心無疑無慮ノ證得也、然ニ四十八願ニ雖レ有ニ種種ノ法門一、所詮皆衆生證得ノ上ノ色色也、故ニ釋ニ

四十八願因レ茲發一一誓願爲ニ衆生一、是ヲ爲三助正重ノ果遂ニ矣。

衆生證得とは、通佛敎の所レ謂冷煙自知の如く、筆舌に上ぼし得べきものではない、證解領得の妙味で、前に云ふ所の因位選擇、諸佛能讃の二重の法門は覺他大悲の窮滿には相違なきも、未だ實行門に開けぬ衆生得益の內證である、內證とて心內の證得かと云へば亦心外である、心外かと云へば亦心內である、能觀所觀と分ち界外の淨土を所觀とするよりは心外とも云はれる、亦所觀能觀不二、生佛不二、機法一體より云へば心內の證得とも云ふべきである、能觀所觀境智分別の邊は依文釋、境智一體の內證は玄義釋と云ふべきである、要するに決定不退の信心無疑無慮の證得往生の蔗境を種種に說述せるものである、一一誓願爲衆生故と知れば正助二業を勵み報恩を策進すべきであるから助正重と云ふのである。

問上來ノ法門誠ニ以甚深也、雖レ然論ニ種種ノ差別一ヲ日ハ猶隣ニ敎相一ニ其意猶豫ス如何專心ニ可ニ決定スヲ乎、答此ノ不審甚深也輙ク難レ辨ヒ、但シ如ニ前ニ云カ一彌陀ノ因位ニ所レ誓取ニテ乃至十念ヲ一釋ニ選擇本願念佛ト一、此ノ念佛カ正ク亡ニ思量一離レタルニ言語ヲ一功能超絕ノ大悲也、然ル則早ク捨ニテ敎相之道ヲ一

還ニ本願念佛ノ所一ニ安ニ住同體之大悲一ニ人ヲ名ニ決定往生最勝人一、西谷ノ言ヲ彌陀智願海ノ念佛三昧、超世ノ別願ナル故ニ、釋尊モ三身門ノ位ニナハ說キ顯ス「之ヲ都テ不レ可レ叶、又就テ第二ノ報身ニ有リ自受用他受用ノ二身一、他受用身ト者對ニ十地ノ菩薩一ニ說法利生キフ身也、自受用身ト者言語道斷心行所滅自受法樂ノ身也、此位ハ非ル十地ノ境界一ニハ也、今彌陀智願海ノ念佛三昧ノ此ノ自受法樂ノ上ニ尙ヲ立超タル無上大利ノ功德也、故ニ三身門ノ位ニテハ不レ能レ說ニ顯「之一、來モ觀經一ニ尙ヲ說ク尼觀佛三昧ノ位一マテヲ、選擇本願念佛ノ彌陀智願海ノ所ハ、言語ニ不レ及處也、云々。

文解し易し。

私ニ推スルニ此ノ御義一ヲ今ノ四十八願酬因ノ報身ノ智ハ、顯ス第二ノ報身ノ智ノ有無ノ上ノ有ト意歟、然ル故ハ彼ノ自受用他受用ハ第二ノ報身ノ有無ノ二智也、故ニ經云他受用身諸相好隨機應現無增減爲化十地諸菩薩一佛現ニ有十種身一、已上、又云自受用身諸相好一一遍滿十方界四智圓明受法樂前佛後佛讀皆同、已上、今此ノ彌陀報身ノ智願ハ彼ノ有無ノ上ノ超世本願ノ有也。

四十八の別願酬因の彌陀は、通途酬行の報身に超異することを顯はす、他受用報身は、十地の菩薩の爲めに十種身を現ずる、有無の智の有の方、自受用報身は、自受法樂、他の爲めに現せぬから有無の智の無の方、今彌陀はこの有無を超異せる、有無の上の有である、なぜなれば指方立相の極樂土の報身なるが故に有と云ふのである。

就テ此有一有ニ觀佛念佛ノ二智一、觀佛三昧ノ智ハ異方便ノ智ハ、念佛三昧ノ一法ハ異方便ノ智モ不レ及處也、應レ知、次ニ植諸德本至心廻向ト者十九ノ願ノ修諸功德ハ、顯ニ本所修ノ功德一也、十九ノ願ノ至心發願ハ顯ニ廻心轉成ノ發願一ヲト也、是卽本所修ノ善根ハ往生スル衆機ノ形也、發願廻向ハ同ク願力歸命ノ安心ノ色也、其旨三輩九品ノ文ニ分明也。

文解し易し。

次ニ常ノ義ニ云ク、或云第二十願ノ宿善果遂也、以テ過現ト現未ノ二門ヲ一述レ之、謂ク過現門ハ者、於テ過去世世ノ中一ニ、植テ衆ノ德本一ヲ現在世ノ中ニ至心廻向ノ次ノ之生ニ方ニ得ニ往生一ヲ、現未門ノ者、於テ現世ノ中一ニ植ニ衆ノ德本一ヲ、未來世ノ中至心廻向ノ、第三生ニ方ニ得ニ往生一ヲ、三生ノ往生ハ就ニ勝根一所レ論也、或ハ云ハン可レ通ニ四生已後一ニ、德本ニ有ニ淺深一、至心ニ有ニ遲速耳、或ハ云ハン本願ノ利益ハ可レ限ニ三生一ニ、世世生生ニ大悲覆護ノ促ニ無窮ノ生死一、不レ久卽令ムレ入ニ淨土一ニ、喩ハ如下

呑鉤ノ魚ノ在レ水不上レ久、云々、夫就テ機情ニ論ルニ「宿善ヲ一段トシテ而有レ之、然ラ者ハ是等ノ義モ無ニ妨碍一歟、

文解し易し。

但シ善導家ノ意ハ別ノ旨趣也、可レ知。

これは西谷已來の論法にて、通途(諸家)には三生果遂を談じて二十願を結す、導師亦諸師の說を許して三生果遂を一往立つ、これは初重廢立の如きである、導師の別旨は、諸師の外に、三願果遂、四十八願果遂等、卽ち先に述ぶる如き義は、西谷の創見に非ず、善導の正意を其儘記述したる、西山善導正流の說なりと云ふの意、尙ほこれらの論調は、行觀師の選擇集私記の廢助傍の三義殿最難レ知の釋下など參照すべきである。

第二十願眞宗義

願名

第二十願　眞宗義

願名　化卷に四名を出す、一に植諸德本之願、二に係念定生之願、三に不果遂者之願、四に至心廻向之願である、四名中第二第三名は諸師にも通ずる、只具略の異のみ、義寂は攝取聞名欲生ノ願、智光は聞名係念修福卽生ノ願、良源は聞名係念修善定生ノ願と名けてあるからである、植諸德本ノ願と、至心廻向願ノとは、高祖の御自名である、其中第一名は、自力念佛を顯はす宗義の名であるけれども、文にあるに任せて本名と定め給ふ、第四名は十九願下の第五名と同く文にあるといへども、宗義を顯す別致なるに約して亦可名に屬するのである、化卷初に願名を標するに、至心廻向之願と提擧し給ふ、宗義の別名である、初に植諸德本之願とは、これ小經顯說の意、念佛は多善根である、萬善圓備して衆善の根本であるから善本と名ける、十方三世の諸佛德號の本なるが故に德本と名ける、今は德本を擧て善本を攝する、諸の言は諸佛を指す、德は德號、本は根本、この名號は十方三世諸佛德號の根本なるが故に、諸德號の本の依主釋である、この德本を以て己れが善根とする故に植と云ふ、植は種植の義で策修を顯す、これ疑情自ら覆ふて法體を全領すること能はざるの所作である、係念定生之願とは、係念には下の行信を攝する、定生は化土定生、謂く一度念を係くれば、生を隔てゝも空しからざる故係念定生と

いふ、係念は因に約す、定生は果に約す、因果立名である、不果遂者之願とは、念を彼國に係るものは、若は二生、若は三生等、遂に尅果するから、不果遂者と云ふのである、委くは下に論ず、至心廻向之願とは、十九と二十とに、發願と廻向とが互ひに通じてあることは、第十九願下で辯じた通りで、今二十願に特に廻向を誓ひ給ひたは、本願の名號は正定業にして、不廻向の行體である、それを己が善根として廻願する、廻願するから法體に背く、之が二十願の失である、故に二十ノ願に廻向と說くのである。

願體　一云果遂願體と、なぜなれば化卷に果遂之誓と標し、二十願也と詮示までしてあるからと、今云し十八十九二十の三願は生因願であるに果遂願體とは理に合はぬ、今云く植諸德本至心廻向を幷取して願體とすべきである、なぜなれば牽果の用は必ず行心相扶相成でなければならぬからである、しかし三願相對して所主を云はゞ、至心信樂及び至心發願に對する時は、至心廻向を體とすべきである、既に廻向と云ふ、所廻向の行附隨すること無論である、又念佛往生及び諸行往生の行差別に對する時は、植諸德本と云ふべし、既に植と云ふ、這語自ら定散策修挾善趣求の義を顯はす、乃ち至心廻向を攝

する植諸德本であることが知られる。

攝屬　明教院は不虛作功德の一分であるから、佛功德に攝すと、淨影幷に安永錄は攝生の顯とする、どちらでも云はれる、窮屈に限定せぬがよからふ。

十方衆生　三世に約して解せば、三願の十方衆生、同じく法界の衆生を攝盡するから寬狹がない、第十八願下にて詳述の如し、若し願々の當機に約せば、十九願は修善の機、二十願亦然りである、十八願は善惡通往で、善もほしからず、惡も恐れなしである、又正所被を論ずる時は、この中亦同別がある、凡聖を分別せば、三願幷に凡夫爲本である、その中で善惡を分つに、十九願は善機を正機とし、十八願は惡人往生を正機とし、二十願は、策勵念佛の邊は善人正機と云ふべく、大悲攝化の邊は、上六品より寧ろ下三品にありと云ふべきである。

係念　說文に係は束也とある、自力稱名の行人係念相續して淨土を欣求し或は定心或は散心二報莊嚴を思想憶念して斷絕せざる也。

植諸德本　正く起行を誓ふ、植は種植、往生のために、名號の因を策修するのである、

さて二十願を稱名一行とするに、略して五の見込がある、一に如來會及び覺經に依るが故に、如來會には、若我成佛無量國所有衆生中聞レ說二我名一以二己善根一廻二向極樂一若不レ生者不レ取二菩提一」と、念佛一行の外更に餘善を說かず、亦平等覺經には「非レ有二是功德一人不レ得レ聞二是經名一唯有二淸淨戒一者乃還聞二斯正法一惡憍慢蔽懈怠難三以信二於此法一宿世時見レ佛者樂聽二聞世尊敎一」と、有是功德と說けるは宿善となる諸行である、その宿善で平等覺經名、その體卽ち彌陀の念佛を聞くことを得と云ふこと、有是功德とは宿善諸行と云ふ事は、次の唯有淸淨戒者乃還聞斯正法の句を以て反推すれば分明である、二には願文に聞我名號とあるが故に、可知、三には小經の嫌貶開示に依るが故に、小經の說相全く今願に恰當する、執持名號乃至若七日は、今願の係念我國、又は植諸德本に當り、一心不亂は至心等に當る、特に聞說阿彌陀佛の句は、今願の聞我名號に對配すべきである、してみれば今願の聞我名號も、亦諸行少善と嫌貶して、植諸德本の稱名大善を開示するは無論である、四に小經に諸行を少善少德と貶す、之に對すれば、念佛は大善大功德の故に之を今願德本と云ふ、彌陀念佛は諸善功德の根本であるからである、故に襄陽石碑の經には、念佛を多功德多善根と云ふ、五に龍祖は「若人種二善根一疑則華不レ開信心淸淨者華開則見レ佛」と、稱名易行中に於て信疑廢立を示すが故である、さて德本とは、法華文句五三七には德衆善ナリ衆善之本故曰二德本一と、磐若の智をば諸德の本としてある、今は名號を以て德號の本とするのである。

至心廻向　至心とは本願の嘉號を以て己が善根と眞實心をこらすこと、廻向とは挾善趣求の廻向、大乘義章大四三七に云、「廻二己善根一有レ所二趣向一故名二廻向一」と、自力の心を以て名號を稱念し、至誠眞實を勵して、所修の念佛を廻向して往生を願求するのである。

不果遂者　法霖師の大經要解に云、三生果遂である、之に二種の義がある、一は此土二生、淨土一生である、二に此土一生、化土一生、報土一生である、當流多く後義、しかし化卷に一生に三生を經るの義があるから、一概出來ぬ、三生果遂は華嚴の三生成佛に倣ふと、峻諦師の大經會疏には、果遂に通別二義があるが、通の中に遠近が分れ、遠生果遂とは、法華の一聲南無佛皆已成佛道の類で、呑鉤の魚、下種田地の如し、近生果

遂とは、念佛三昧經の聞三昧の類で、日出でんとして明相先づ現ずるが如し、二に別して當益の果遂とは、疑惑胎生のもの、疑障を除き佛所に到るを果遂と云ふ、この中二生三生等あり、亦韋提の如き一生果遂あり、亦高祖も一生果遂であるとて、化卷三願轉入の文を引けり、六要鈔には、一生聞名、一生化土、一生報土、かく意得れば、果遂の益報土なるべし、經云若此衆生識其本罪深自悔責求離彼處往詣無量壽佛所と、彼の往詣佛所を指して果遂と云ふのである、これは生を改めぬけれども、三種の障を離れ、三種の益を得るのが、義轉生に當る、例せば變易生死の如しと云ふてある、道隱師の大經甄解は全く六要鈔を承用して、之を現未門二世三世の果遂說と云ふ、そうして有說の三願轉入を以て果遂とするの義を難問して云く、それでは高祖は漸機となる、大に傳文に違す、又念佛諸行混雜の失がある、なぜならば、果遂の起點は二十願自力念佛、三願轉入の起點は十九願諸行であるのを一混することになるからである、又三願轉入は因門入法の不同に就て之を明す、三生果遂は隔生尅果不同に就て明す、又三願轉入は弘願に入るを期とす、三生果遂は眞土に生ずるを期とす、因果不同所期不同のものをなぜ一混するやと難ず、智暹師の樹心錄には三生の義二あり、一に經生至三、二に歷念至三、初めの經生に亦二義あり、一に過去聞名係念、これ第一生、現在獲信歡喜これ第二生、未來報土眞生これ第三生、宗師云過去己曾等、これ卽ち二生穢土、一生報土である、二には六要の義の如く、一生穢土、一生化土、一生報土である、次に歷念とは、高祖以下に云、久出萬行諸善等とあるがこれであると、石泉師評云「經生歷念立名未善謂之約報約心則可」と、今云く、不果遂者とは、當分に約すれば、眞門の行者係念空しからずして、その所期を尅するを果遂と云ふ、聞名係植德本廻向願生みな現在にあるので、化土定生を當來の得益とする、則ち難思往生である、又終極に約すれば、眞門往生の人、終に化土より眞土に轉入するを果遂と云ふので、此一彼二の二世三世にして、現在世此土一生と、未來世化土一生と、及び報土一生である、既に分段、(此土一生)、變易(化土一生)、俱絕(眞土一生)の差別歷として看るべきである、願文欲生我國に對して、不果遂者と誓ふ、果遂の言往生の證果を指す事明かである、要するに、植諸德本の行人は、當分は二世二生の化土往生にして、終極は二世三生、眞正佛果に達せしむるの誓意である和讃に云「定散自力の稱名

は果遂のちかひに歸してこそおしへざれども自然に眞如の門に轉入する」と、眞如の門とは、門は眞土の廣門相、眞如はその略門である、卽ち安樂淨土廣略二而不二の妙境界を云ふのである、化卷に「果遂之誓良有由哉」とは、これ難思議往生を果遂するので、上記の二文ともに入弘獲信の謂ひではない、故に三轉入と混說してはならぬ、三願轉入は一世一生、二世二生、機類によりて定數がない、今果遂は然らず、唯局りて往生の二世二生、及び二世三生あるのみである、但し以上は二十願至心の機に就て立言するもので、不至心のものならば、次生化土へも往く事かなはぬ、これ等種々の分類は論場にて研究すべきことである。

三願講說終

昭和四年七月五日印刷
昭和四年七月十日發行

〔定價 金壹圓五拾錢〕

著者 朝日保寧

發行者 京都市五條通高倉西入萬壽寺町五十四番地 西村十次郎

印刷者 京都市下河原高臺寺前 西村太郎

發行所 京都市五條通高倉西北角 大阪振替口座二二三六五番 爲法館

不許復製

藤守曉明著　最新刊出來

彌陀にマカス論

四六判クロース箱　定價金壹圓八十入錢　送料二十錢

教義は古き歴史則ち古典古義の變化潮流を探らば、茲に教義の眞義が判然とします。今日古典古義の廢れゆく時に安心領解の發表は此意義に於て容易の事ではありません。即ち古より今に一貫の領解の發表でなくてはなりません、之を現在に寫して意義の變化せざる程度には顯すことは難澁であります。今著者が茲に留意して一文一句も聖教の源を探らずば領解發表は出來ないと云ふ決心は、世間に對して誤りを少く述べる事が大事であるとみられたのであります。

茲に著者は相承、比較證明研究解決の五篇に分ち、更に各篇に章項を設け、精細明晰永年自己の體驗を發表せられたる快著である。恐らくは眞宗の信仰界を靈化せずば措かぬであらう。敢て燈下机上に推奨す。

文學博士　村上專精　著

眞宗の眞面目は那邊に存する乎

四六判百頁　郵税定價五拾錢　四錢

（内容）一金子大榮君の淨土觀念、如來及淨土の觀念を讀む—第一の感想—第二の感想—眞宗開闢の動機—蓮如上人と金子君との對關—吾人の實驗。二眞宗とは何ぞや（眞宗の定義）—何ぞやの問題解決—眞宗の祖師に二つあり—親鸞聖人所說の權威—覺如上人—聖人の權威—覺如上人及蓮如上人の存覺を疎んずる所以—蓮如上人の御立腹—眞宗學の名目及其の定義。三眞宗の特色を極む—眞宗學の先決問題—宗祖の行狀に就いて—特色—教道元禪師と親鸞聖人—法然上人と宗祖親鸞聖人—他力信仰の特色を伺ふ—沙彌教相の施設—に就いて眞宗の教信決を語る術—一枚起請文—獄異鈔眞宗の秘訣—顏淵の感想—三師相承。四眞宗の眞面目—蓮如上人の中興—蓮如上人の眞宗中興事業—教導の眞宗の祖崇敬の回顧談—過雖去の回想—吾輩の信仰の淨土教の秘訣。五吾輩の信仰の動機—外

問題の新著現る

伊藤義賢　梁瀨齊聖　共著

念佛信心安心論爭集

全四六判一八八頁　一定價金七拾錢　冊送料四錢

本書は眞宗教界に多大のセンセーションを投げ掛けた所謂異安心？念佛の信心の論爭を採錄したものである、果して正安心なるや異安心なるやは本當の意味で未解決に殘されてゐると云つてよい實に梁瀨齊聖氏の投げた「念佛の信心」なる手擲彈は案外强烈なる音響を立てゝ所謂象牙の塔に立籠れる默々相承、一器寫瓶の保守主義の宗學者の瞑眠を覺ますに十分であつた、此の事ありてより此の教界に所謂異安心問題なるものが强烈に燃燒し出した事は、おほふ可からざる事實にして如何に人生に宗教が將た信仰が生活上に急迫し然もその信仰の極致を攝み得ざる憾みに煩つてゐるかと云ふ事を適確に如實に證明したる功績は實に偉大なるものであつたとすれば現に念佛の信心に隨喜する數多群衆のあるわけである、又極力反對者もあるわけである。此事は一方梁瀨氏に對するに篤學勤勉の人伊藤義賢氏が眞面目に挑戰したる結果にもよる事にして、昭和劈頭における安心論爭として史的な一頁たるを失はない、即ち本書は伊藤、梁瀨兩氏の死力をつくせる主張、駁論を、比較對照的に收錄したるもので何れの主張にも偏せず讀者をして靜かに且つ自由に兩者の云ひ分を聞き得て何れへ自己の信仰の立場を歸趨せしむるも自由にしてある所に本書の特長がある。

發行所　爲法館書店
京都市五條通高倉西北角　電話下京三二二三番
替口振替大阪三三三八五六番

終